
蛇咬 スネーク・バイト

彼方 ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛇咬 スネーク・バイト

【Nコード】

N0249BA

【作者名】

彼方 ヒロ

【あらすじ】

これは、ある呪術師の物語だ。香我美美輪かがみみわの父親は数年前、家族に対し心中自殺を図った。止めようとした母親は、誤って父親を殺害し、そして、自責の念から後を追って自害してしまう。残されたのは、娘 美輪一人。心中事件として、警察は捜査を早々に打ち切った。しかし。あの事件が、ただの心中事件ではないこと、すなわち両親が、実は何者かに殺されたことを知った時 美輪の心に復讐の牙が閃いた。 *三年前に初めての長編ということで書き上げた小説で、今までずっと人目に触れず眠っていたので、改め

て公開しました。（初期の頃の文章なので、大分文体など違和感を
感じられるかもしれませんが、ご了承ください）

序章 一

ベッドの上で目を覚ますと、もう窓の外はすっかり暗くなっていた。

「もう、こんな時間……」

声を上げると、喉がからからに渴いていることに気づく。寝起きのぼんやりした頭でベッドから降りて、ふらふらと部屋を出た。薄暗い廊下を歩き、居間を目指す。

居間に続くドアの前まで来ると、私は欠伸をしながら片手でノブを握った。

握ったノブを、ゆっくりと回す。鉄が軋む音を立てて、ドアがゆっくりと開いた。私は開いたドアの隙間から、母さん、喉乾いた、と顔をひよっこりと出した。

居間の中央に、父さんと母さんが立っていた。二人を見た途端。悪寒が走った。

二人はびくびくと小刻みに震え、苦しそうに悶えていた。その様子は、明らかにおかしかった。

父さんが、私の視線に気づき、ぎろりと私に目を向けた。その瞬間、父さんの口から獣のような唸り声上がり、私の耳を裂く。

私は、弾かれたようにドアから離れた。けれど、足が思うように動かず、バランスを崩して尻餅をつく。

父さんが私に襲い掛かってきた。

私は腰を上げて必死に逃げようとしたが、すぐにその堅い両腕で首を掴まれた。

「あ　ぐ」

喉が潰れていくような痛み。大きな指が私の首に食い込み、肌を抉っていく。

痛いよ。どうしてこんなことするの？

痛みと悲しみに、目から涙が滲み出る。

どうして、父さん。

父さんの腕が上がり、私の顔が父さんの顔と同じ高さに来る。

父さんは、まるで別人のようだった。

息を荒げ、恐ろしい形相で、私の首を絞めている。

だが、その瞳だけは、いつもの父さんのものだった。

父さんの瞳の奥には悲しみが渦巻いていて、父さんの悲鳴が、泣き声が聞こえてくるようだった。

私は身体を懸命に動かして、父さんの腕から逃れようともがく。しかし、次第に頭に靄がかかり、思考が保てなくなっていく。目が痛みにくらぐらと揺れ、視界が涙で歪む。

父さん、父さん。

私は父さんの目を見つめながら、懸命に心の中で叫んだ。

と、突然私の身体に鈍い衝撃が走る。すると、私の首を絞めていた父さんの腕が解かれる。私の身体は宙を舞って、地面へと落下した。鈍い音と共に、私は仰向けに地面に倒れた。

げげげと咳をして、私は首を押さえる。すぐさま肺に、空気が供給されていく。私は肩を上下させながら呼吸を再開させた。次第に頭の靄が晴れ思考が回復し、おぼろげにしか見えなかった視界がクリアになる。明瞭な視界を取り戻した途端、私の目に飛び込んできたのは、固まったまま動かない父さんの姿だった。

私の首を絞めていた時のまま、両腕を当てもなく虚空へ向けて、中腰の姿勢で動かずに固まっている。しかし、身体は数秒の後に、ぐらりと傾き、重い音を立てて倒れた。

そして、父さんの背中からざらりと何かが光り、私の視線がそれへと移る。背中には、刃物が深々と刺さっていた。その刃物を握っていた手は、母さんのものだった。

私の渴いた喉から、ひつと短く掠れた悲鳴が上がる。

「とうさん……とうさん！」

私が声を上げて駆け寄ろうとした瞬間、父さんの亡骸を見下ろしていた母さんが、

「来ちゃ駄目！」

と叫んだ。

それは、紛れもなく、いつもの母さんの声だった。

その声を聞いた途端、私の胸に一気に安堵感が広がった。私は、制止の声を振り切って、母さんの元へ駆け寄ろうとする。だが、

「駄目……私に近寄らないで……！」

母さんはそう叫び、よろよろと足をもつれさせながら、もう動かない父さんの横で跪いた。

「うつ、ぐつ、ああ……！」

母さんの口から嗚咽に似た声が漏れ、幾筋もの雫が頬を伝る。

「かあさ」

私が駆け寄りながらもう一度、口を開きかけたとき、

「ごめんね、美輪」

母さんが、涙で濡れた笑顔を私に向けて、そう呟き。

父さんの背中に刺さった刃物を抜き、自身の胸へとそれを刺した。……崩れ落ちる母さんの身体。それを目にした私の心臓に、どくんと不気味な音が響いた。

「……どうして」

私は目を大きく開かせたまま、呆然と二人の亡骸を見つめた。

どうして。父さん、母さん。

私の口から呟きが漏れ、血に染まった空間に空しく響いた。

「お客さん。着きましたよ」

低い男の声で、私は目を覚ました。見れば、車窓の外は、懐かしい住宅街の姿が広がっていた。

戻ってきたんだ。

胸の中が、ほんわかと暖かくなる。懐かしい幼少時代の日々が、住宅街の景色と重なって、思い起こされた。しかし、同時に、禍々

しい事件の記憶も思い出す。私は唇を固く引き結んだ。

私が呪術師になった原点がここにある。

呪術という、現実離れたものに触れたのも、全てはあの事件がきっかけだ。

あの事件が起きなければ、私は今でもここで穏やかな日々を送っていたかもしれない。

私が窓の外の景色に見惚れている中、タクシーは、ゆっくりと道の端に停車した。私は代金を払い、一つ礼をすると、タクシーを降りた。

運転手は不思議なものを見るような目で私を一瞥した後、アクセルを踏んだ。タクシーはあっという間に道の向こうに消えていく。

私は、ゆっくりと歩き出した。

人通りの少ない道に沿って、古い民家が立ち並んでいる。昼間だというのに、生活音がほとんど聞こえてこない。私がここに住んでいる頃は、ここまで寂しい場所ではなかったと思う。

子供の頃によく遊んでいた公園があった。公園には、遊ぶ子供の姿は見る影もない。それが、寂しさを一層募らせた。

私は眼前の景色に嫌気が差し、足早に歩き始めた。途中で道を右に折れると、懐かしい家々が見えてくる。

「……あつた」

見覚えのある家が立ち並ぶ先に、忘れようもない大きな家があった。

鍵は開いていた。インターホンを押しても、反応はない。本当に誰も居ないのかと思い、玄関に入って「すみません」と声を上げるが、やはり返事はなく、家に人が居る気配はない。

「鍵掛けてないなんて」

何て無用心なんだろうと、ぴしやりと腹いせに扉を強く閉め、鍵を掛けた。

この家の住人は現在一人だけだ。

現在高校生の従兄弟が、この家で一人暮らしをしている。今日遠

くからはるばる私がやって来ることを知っていたはずなのに、出迎える気は毛頭なかったらしい。

「お邪魔します」と言いながら上がると、この家は元は自分の家だったんだということにすぐに気づき、苦笑した。

私は廊下を歩き、居間に続くドアの前まで来て、足を止めた。ノブを握ると、手が震える。私は一つ深呼吸をして、ドアを開いた。その瞬間、懐かしい匂いが漂ってきた。どくと私の胸が鳴る。私は溢れ出しそうになる感情を必死に抑えながら、居間に足を踏み入れた。

私はゆつくりと部屋を見渡す。

……変わっていない。六年前と、何も。

部屋はまめに掃除され、当時の面影を残したままになっている。居間の先にはドアがあり、その向こうに私や父さん達の部屋が並び廊下が続いている。そのドアの前まで来ると、床にカーペットが敷かれていた。私はしゃがみ、そのカーペットを両手で掴むと、ゆつくりとどけた。

そこには、やはり六年前の事件の痕跡が残っていた。少し黒ずんだ血痕が、床にまだらな模様を作っている。

それを見た途端、涙が目から溢れ出し、床に新たな染みを作った。

父さん、母さん。

そんな呟きが、零れた。

六年前のある秋の夕暮れに、その事件は起きた。

父親が突然錯乱し、娘 私を絞殺しようとしたところを、母親が止めに入り、誤って父親を刃物で殺害してしまう。その後、母親は同じ凶器を用いて自殺する。娘は、二人の死骸の前で呆然と立ち尽くしていたところを隣家の住人によって発見され、保護される。

それが、この家で起きた事件だった。

警察は、父親は心中を決意して、このような凶行に走ったのではないかと推測した。当時の香我美家は、莫大な借金を抱えていて、心中する動機は十分にあったからだ。

事件の後の私はしばらく放心状態で、警察には事件について何も語ろうとしなかった。私の心の中ではただ、「どうして？」と疑問がずっと渦巻いていた。警察側も、幼い私の心的ショックを考慮してか、深くは追求してこなかった。

心中未遂事件として、早くも捜査は打ち切られた。

私は今の両親である老夫婦に養子として引き取られた。幸いなことに、私は二人に愛され、大切に育てられた。それだけではなく、二人は自分達の財産を惜しみなく香我美家の借金の返済に当てた。そんな恵まれた環境下にもかかわらず、私はただ陰鬱な毎日を過ごした。

父さんは、絶対にあんなことをするような人じゃなかった。優しく、いつも私と遊んでくれた。自分の娘の首を絞めることなく、絶対にできない人だった……。

私はそんな風に、長いこと現実を信じられずにいた。

そんな中、私はある事実を知ることになった。

両親の遺品を渡されて、それらを闇雲に漁っていた時のことだった。私は、積み重なった遺品の中に、埃で煤けた古びた本を何冊か見つけた。

その中の一冊を手取る。表紙には何も書かれていなかった。本を開くと、そこには難解な言葉がずらずらと書き綴られていて、当時の私にはその内容はさっぱりだった。それでも、なんとなくその本に惹かれた私は、それが何か解らずとも読むようになった。時が経ち成長するにつれ、私はその意味を次第に理解するようになる。

香我美家は、呪術を継承する家系である。

ある一冊を開くと、一行目にはそう書かれていた。それを読み進めていくと、香我美家は驚いたことにその言葉の通り呪術を継承する『呪術師』の家系で、子供ができると、親はその子供がまだ小さいうちから、呪術の修練を指導するのだという。

『呪術』とは、一体何か。

ある本の記述によると 「呪術とは、超古代から連綿と伝え研

究されてきた魔法、すなわち超常の力のことを指す」とあった。

簡単に言ってしまうえば、呪術とは超能力に近いものだ。高度な呪術を行うには修行して、経験を積まなければならない。

私は、呪術とは何かを理解した時、首を傾げずにはいられなかった。私は両親に呪術なんてものを習ったこともないし、そんな言葉が聞かされたこともなかった。

そこで、一つの想像が頭を過ぎった。

父さんと母さんは、私が平凡な人生を送ることを願ったのではないか。

しかし、私は、父さんと母さんのその願いを知っても、呪術について語られたその書物を捨てることはできなかった。私は何よりも、真実を知りたかったのだ。

真実を知る一心で私はひたすら書物を読み続けた。ある時、”呪術の修練と使役”について綴られた本の中の、ある呪術の項目に目が釘付けになった。

『蛇眼』。

その効果の種類は広範囲に渡るが、主に金縛りを引き起こす。強烈な蛇眼は、例えば、その人間を傀儡にさせることも可能である。

この『蛇眼』という呪術は、睨んだ相手を意のままに操ることができるという、便利にして凶悪な呪術だった。

私は、こんな効果を持つ呪術があるとは知らず、ただ驚いた。

……同時に、ふとある考えが浮かんできて、私は背筋が寒くなった。父さんと母さんは、他ならぬこの呪術という兇器によって、誰かに殺されたのではないか。

事件には、たくさんの不可解な点がある。

居間で苦しそうに悶えていた二人。

父さんの、原因不明の発狂。

母さんの、突然の自害。

『呪術』という一つの可能性を考えることによって、徐々にピースが繋がっていく。

この『蛇眼』という呪術を行使すれば、父さんと母さんを殺すことができるのだ。二人の不可解な行動も、説明できる。

そう、例えば、二人が『蛇眼』の呪術によって、『殺人を行え』という強い暗示を掛けられた場合を想定してみる。二人の理性はその命令に必死に反発するだろう。しかし、理性でその殺人衝動を抑えられなくなった時は、どうなるか。……簡単だ。その時は、殺人人形に成り下がるしかない。

父さんは何者かによって暗示を掛けられ、理性が保てなくなり、殺人に走ったのだ。

母さんは、理性を保とうと苦しみながらも、父さんに殺されかけていた私を救った。そして、自分の理性を保てなくなのは時間の問題だということを悟ったのだろう、自身の胸を刃物で刺し、自ら命を絶った。

死ぬ前の母さんの言葉を思い出す。

駄目……私に近寄らないで……！

精神が錯乱していたために出された言葉と考えるのが、普通だろう。

しかし、真実はそうではなかったのだ。

今の自分に近寄れば、躊躇なく殺してしまうかもしれない。そんな警告を秘めた言葉だったのではないか。

この推測が本当ならば、二人は何者かによって殺されたことになる。事件があった日の夕方、私が寝ている間に、何者かがこの家を訪ね、二人に呪術を掛けた。

深い憎しみが私の心にじわじわと広がっていった。

そして 私は呪術師を目指すようになった。

呪術師になって、事件を究明する。そして、父さんと母さんを殺した者がいるならば、他でもないこの呪術によって、その者に復讐しようという決意したのだった。

私は、何年もの間、我慢強く呪術の修練をこなし続けた。年月はあっという間に過ぎていき、今、私は十五歳、中学三年になった。

既に、書物に書かれたほとんどの呪術をマスターしている。一年に一度はこの家を訪ねて事件の手がかりを探してきたが、今までに、それらしきものは一度も発見できなかった。

一頻り泣いて落ち着くと、私は涙を拭いて、立ち上がった。悲しみはほとんど涙と一緒に出し切った。だが、その代わりに憎しみが胸に渦巻いている。

一先ず目の前の濡れた床を拭こうと思い、私は腰を上げた。と、
「あれ……？」

私は雑巾を取りに台所に向かおうとして、ふと壁が一部分だけ真っ黒に汚れていることに気づいた。よく見れば壁紙が剥がれている。触ってみると、埃で指が真っ黒になった。

剥がれた壁紙を捲ってみると、そこには。
「本？」

壁紙の隙間からそれを取り出す。私はその本を軽く叩き埃を払ってから、開いた。

筆跡は、明らかに父さんのもの。数ページ捲ってみて、これが父さんの手記であると判断した。

私は焦る気持を抑えながら、手記を読み出す。どんな衝撃的なことが書かれているのだろう、と私は身を強張らせて読み進めるが、予想に反して、それは幸福な内容だった。

月×日。

今日は美輪と一緒に絵を描いた。美輪は、私に似て絵が下手だ。私達は、お互いの絵を見て、笑い合った。

月 日。

美春と美輪と、三人で外食に行った。

美輪と公園に行った。

映画を見に行った。

旅行に行った。

私は懐かしい日々を思い出し、目が潤むを感じた。
だが。

このまま幸せな思い出を綴るだけで終わると思った時、その一文が現れた。

治也が、私を殺そうとしている。

見れば、その文の横に、事件の一週間前の日付があった。

今日、私の遠い親戚である加賀治也が久方ぶりに私を訪ねてきた。治也は、昔と何ら変わっていない。残忍で狡猾な男だ。治也は、妻の智夫人と共に 私はあの女の正気を疑う 私に誘いを持ちかけてきた。

私は、当然断った。人殺しの誘いを、受ける奴が居るものか。憤慨した私は、奴らを家から追い出した。

治也と智夫人は私を無言で一瞥すると、そのまま何事もなかったように去っていった。私は彼らに無言で見つめられたとき、背筋を寒いものが走るのを感じた。

そう、二人の目の奥には、純粹な殺意があった。

美春は二人を怖がって、泣き出した。美春は言う。

きつと私達を殺しに来るわ、と。これを書いている今も、美春は泣いて私の元を離れない。

彼女を元氣付けている私も、恐怖で身体が震えてどうしようもない。助けてくれ。

最後には、そう書かれていた。その声は、誰に当てたものでもない。だが、懸命に誰かに訴えている声でもあった。

字はすべて、ぐにやぐにやに曲がっている、きつと、ペンを持った手の震えが止まらなかったのだらう。

私は怒りに、唇を強く噛んだ。口の中に、血の味が広がる。

どん、と私は右手を壁に叩きつける。その拳は、木製の壁をいとも簡単に突き抜けた。私は、ゆっくりと壁に食い込んだ腕を引き抜く。切れた肌から血が溢れ出し、腕を伝う。

視線を手記に向け直し、その後の記述を見る。加賀治也への恐怖が延々と書き綴られていた。

そして、手記の最後には、事件の日付と、父さんの遺言らしきも

のが書いてあった

これから、治也が私達を殺しに来る。残念ながら、私達は逃れる術を知らない。まもなく私達は殺されるだろう。

私はこの手記を、誰にも見つからないように不可視の呪術を掛けて隠しておく。

もし、私の掛けた呪術を破り、この文章を読んでいる者がいるならば　どうか、あなたがあの二人を止めてくれ。

……最後に、美輪へ。心から愛してる。

香我美浩一郎。

私は手記を抱きしめて、父さん、と呟き、

「　殺してやる」

と、齒軋りしながら呪いの言葉を口にした。

長年求めていた答えが、ようやく見つかった。

父さんと母さんを殺した人間の名は　　。

「加賀治也、加賀智」

……憎しみが湧き上がり、体内の血が疼く。早く、二人を殺したいと身体が叫んでいる。

手記には、加賀治也と加賀智の住所が書かれてある。ここから車で三時間ほどの距離にある葉月市に、二人が住んでいる屋敷があるらしい。今でもその屋敷に住んでいるのだろうか　それは解らないが、確かめてみる価値はある。

……今すぐ彼らを殺しに行こうか。そう考えて、私はいや、駄目だと首を振る。

それはさすがに焦りすぎだろう。計画を練ってからの方が良い。

だが。

悠長に待ってもいられない。

早く、早く、と急かすように、体内の血が沸き立っている。

「殺してやる」

私は父さんの手記を握り締め、衝動に押し流されるように、家を飛び出した。

序章 二

夜竹市から電車に乗ること、約三時間。私は葉月市に足を運んでいた。

私は今、葉月駅から徒歩三十分ほどの距離にある住宅街の中の、ある屋敷の門前に居る。

時刻はもう既に夕方を回っている。通りには、通行人が誰一人としておらず、しんと静まり返っていた。

私は門前で、インターホンを押そうか押すまいか躊躇していた。インターホンへと差し向けた指が、震えている。

この屋敷の中に、父さんと母さんを殺した犯人がいる。そう考えるだけで、喜びと憎悪の感情が溢れ出し、先程から身体が震えてどうしようもない。

……呪術を行使して、屋敷の中の気配を探ってみる。現在、この屋敷には、一人の気配が感じられる。

この気配を持つ人間が、本当に私の両親の仇であったとしたら、私は躊躇なく殺しに掛かるつもりだ。もし仇ではなかった場合は、情報収集だけして一先ず撤退する。

もし、殺し合いになった場合、果たして私は勝利できるだろうか。絶対に勝利できるという確信は、残念ながら私にはない。けれど、今まで『備え』は十分してきたはずだ。

……そう、この復讐の為に私はどれほどの時間を呪術の修練に費やしてきたことか。今なら、どんな呪術師が相手でも打ち負かす自信がある。

……ここに来て、さすがに事を急ぎすぎではないかという考えが頭を過ぎる。しかし、私はすぐにその考えを振り払う。

遅かれ早かれ、私は奴らに贖罪させ、その息の根を止めるつもりだ。ただ、その時期が少し早まったというだけの話。

ごくろ。

唾を飲み干し、腹に力を込め、私は思い切ってインターホンを押した。

……心臓の鼓動が激しい。落ち着け、という私の心とは裏腹に、心臓はますます飛び跳ねるように暴れだす。

門の先からがらがらと戸が開く音がし、「はい」と明るい女性の声が響いた。私と同じくらいの歳の少女がしっかりと足取りでこちらに歩いてくる。少女は制服を着ていて、どうやら私と同じ中学生のようだ。

私は、想像と随分かけ離れた風貌の人物が出てきたので少し面食らったが、すぐに顔を引き締めて心の中で警戒する。

「あの、どちらさまでしょうか」

門の前に立った少女が、私に笑みを向けて言った。

少女の長い髪が、風で微かに揺れる。その艶やかな黒髪は夕日に照らされて輝き、私はこんな状況下にもかかわらず、見惚れてしまった。

それだけならまだしも、とんでもなく綺麗な顔で笑いかけられるものだから、こちらとしては、たまったものじゃない。

「私は、香我美といいます……」

「はい。香我美さんですね」

少女を見ると、声が震え、次第に頬が熱くなるのを感じる。女の私でも、どくと胸が鳴ってしまふ様な満面の笑顔。

……とにかく、落ち着かなければ。

私は深く息を吸って呼吸を整え、口を開いた。

「加賀治也さんと智さんは、ご在宅でしょうか」

私の言葉を聞くと、少女は、え？と一瞬困惑の表情を浮かべた。しかし、すぐに笑顔に戻り、口を開いた。

「……失礼ですが、あなたと二人の関係は？」

「二人は私の親戚です」

私の両親を殺した二人と私は、血が繋がっている。これは、残念ながら紛れもない事実だった。怨敵である加賀治也と加賀智の二人

は、私の遠い親戚に当たるのだ。

その事実を認識すると、吐き気がするほどの嫌悪が出てくるが、私は顔に出すまいと必死にそれを抑えた。

……とりあえず、頭の中で状況を整理する。

今、この屋敷には、一人分の気配しかない。つまり、その気配は眼前の少女のものであって、二人のものではない。結果的に言えば、この屋敷には二人はいない。

したがって、残念だが、今日のところは二人の命を奪うのは諦めざるを得ない。

即座に、目的を情報収集へと変える。

「……今、二人はこの屋敷にはいません」

予想通り、少女は首を振ってそう言った。

「何時頃戻られますか？」

私がそう追求すると、少女は俯いて表情を翳らせる。

「……二人はおそらく、当分の間戻ってこないと思います」

少女の声音が、先程の明るいものから、悲しみを含んだ暗いものへと変わる。

「それは、どういう……？」

私が疑問の声を上げようとしたとき、少女の言葉がそれを遮った。「ですが、きっといつか戻ってくると思います……いえ、必ず戻ってきます」

少女はまるで自分自身に言い聞かせるように、そう言った。

少女の深刻な問題を抱えているような様子から、私は徐々に事態が飲み込めて来たような気がした。

「二人は、どこへ？」

私は逸る気持を抑え、できるだけ優しい調子で、少女に問う。

「二人は今……行方不明に」

「なっ……」

……心のどこかで、そんな予感はしていた。だが、少女の口から直接その事実を告げられた途端、危うく膝が崩れかけた。

……行方不明？ 私の両親を殺した後、二人は逃げたとでもいうのか。

「具体的に、いつ頃からですか？」

私は、震えた声で聞いた。

「確か、今から六年前ぐらいに」

六年前。私の両親が死んだ時期だ。

目の前がだんだん暗くなる。しかし、私は必死に意識を押し戻して、眼前の少女を見据えた。

……ここで心が折れてどうする。逃げたというのなら、地の果てまで追いかけて殺すまでだ。

「そうですか……そんなことになっているなんて」

私は悔しさに顔を伏せながら、呟いた。

……二人が行方不明であるというのなら、子供の方はどうなのだろう。手記によると、加賀治也と加賀智の間には、私と同年の息子が一人いるはずだ。

「……二人のご子息はどうしてますか」

私がそう聞くと、少女は一瞬ご子息？と首を傾げ、

「ああ、智也のことですか。智也なら、今出かけてます。もう少ししたら、帰ってくると思いますけど」

話題がその少年へ移った途端、少女の顔が明るくなった。

私は、胸の中で微かな戸惑いを覚えた。

加賀智也。加賀治也と加賀智の子供。

……彼は、復讐の対象に入るのだろうか。二人の子供と言うだけで、彼自身は何も悪くはない。しかし 彼はおそらく、二人から呪術を教えられているはずだ。呪術師の血筋が途絶えることのないように、親は子が幼い頃から、呪術を教える。

もしも、加賀智也が両親のように人殺しを平気でするような人間だったとしたら。私は彼を殺さなければならぬ。

「智也も、こうして親戚の人が訪ねてきてくれた事を知ったら、とても喜ぶと思います」

少女が、本当に嬉しそうに笑った。

私は彼女の笑顔を見ると、自然と自分の強張った表情が柔らかくなっているのを感じた。

彼女にこんな笑顔をさせる彼は、一体どんな人間なのだろうか。どうしてか、彼女の笑顔を見てみると、彼が悪い人間であるとは、とても想像できない。

「失礼ですが、あなたは？」

と、私は口を開く。

「私は、この屋敷の隣に住んでる水西です。智也にちょっと留守番を頼まれてて……」

私はそれを聞き、内心驚く。私の心中を悟ったのか、少女は苦笑しながら、

「他人に自分の家を任せるなんて、無用心だとは思いますが……私達にとっては、当たり前のことなんですよ」

「……智也さんとは、随分親しくされているんですね」

「ええ。ちっちゃい頃からよく一緒に遊んで……智也とは、長い付き合いになりますね」

彼女の言っていることに嘘偽りはないか、瞳の奥をじつと見る。

私は『読心術』を備えている。相手の顔の筋肉の緊張や緩みなど、表情の微妙な変化や、動作・声質の変化、さらには心音の変化などを察知することによって、相手の心を読む、という術を私は会得しているのだ。

ここで言う『読心術』とは、呪術師として様々な修行で呪術の基礎を学んだ上で会得した技であるから、常人には真似出来ない技だ。……彼女が話していることは、どうやらすべて真実らしい。読心術なんて、使わなくてもそれは解る。彼女の笑顔が、偽りであるとは思えないし、そうでないと私は信じたい。

「二人が行方不明ということは、現在、この屋敷には、智也さんが一人で住んでいるんですか？」

少女は、そうです、とどこか寂しげに頷く。

「智也は二人が行方不明になってから、叔母さんに引き取られてこの家で暮らすようになったらしいんです。けど、その叔母さんはすぐに智也をほったらかしにして、どこか遠くに行ってしまった……」

水酉さんの声には、怒りが含まれていた。

皮肉なことに、加賀智也の境遇と私の境遇は似ていた。彼と私で違っていたことは、私には引き取ってくれた今の両親が居たけど、彼には家族と呼べる存在がいなかったことだ。私だったら、ずっと一人で生きていくなんて絶対に耐えられない。

「良かった……智也にも、親戚が居たんだ……」

不意に、少女が安心した表情を浮かべてそう呟き、吐息をついた。

「智也さんは親族の方と今まで付き合ってたんですか？」

「そうみたいです。智也と出会ってこの方、あなたのように、親戚の人がこの屋敷を訪ねてくるなんて一度もなかったと思います」

父さんの手記には、加賀家は親族に疎遠されていると書かれていた。それは、そうだ。人殺しを平気でするような奴らだったんだから、軽蔑されても仕方がない。加賀家は、呪術への執着心が非常に強く、家の者は生涯をその研究に捧げていたという。本家である加賀家を残して、分家が次々と呪術を投げ出していく中で、加賀家は周りのことなどお構いなしに、黙々と呪術の研究を進めていたという。

だから、加賀家が孤立していたのは、十分に解る。けれど、加賀智と加賀治也が行方不明になり（どこかに隠れている可能性も否定できないが）、その息子の加賀智也は本当に一人ぼっちになってしまった。親戚中に見放され、一人でこの屋敷に取り残されてしまった。

両親が行方不明になった当時、加賀智也は私と同じ、まだ小学二年生だった。幼い彼にとって、その運命は、あまりにも厳しすぎたのではないだろうか。

「智也は頭が良いから、なんでも一人でこなせちゃうんです。けど、この広い屋敷に一人だけで暮らしていくなんて、あまりにも寂しす

ぎるじゃないですか。だから、私は無理を言ってもこの家に入りこんで、智也をあまり一人にさせないようにしてます。智也は…私の家族なんです」

彼女の言葉に、私の心は強く揺れ動く。

……そうか。彼は決して一人ぼっちだった訳ではなかった。他でもない、目の前の彼女が居たから、彼は今まで生きてこれたのではないか。

「智也、遅いなあ……。せっかく親戚の人が来てくれてるのにな。

推薦に受かったからって、この頃毎日ぶらぶら遊んでいるんだから」
水西さんが、遠い目で赤く染まりつつある空を見つめながら、呟いた。

私は黙って、その横顔を見つめる。

私は、加賀智也に会ってみたいと思い始めていた。彼が親の二の舞にならないか、その人格を確かめたい為でもあるし、純粹に自分の境遇に似ている彼に興味が湧いたからでもある。

「加賀美さんって、今何歳なんですか？」

突然、水西さんが私に柔らかな視線を向けて、言った。

「15歳です。私も今年、受験なんですよ」

「そうなんですか？じゃあ、私達と同じ学年なんですね」

水西さんが、胸の前で手の平を合わせながら、笑う。その仕草がとても可愛らしくて、私は頬が緩むのを感じた。

「ちよつと驚きです。私より年上なのかと思ってました。香我美さんの話し方、すごく丁寧なんです」

彼女の言葉は意外だった。私は、そうでしょうかと首を傾げる。

「香我美さんって、どことなく智也に似ている気がします」

「智也さんに？」

「私と同じ年のはずなのにどこか大人びているところとか……」

水西さんはそう言うってから、慌てて、悪い意味じゃなくてです、と付け加える。

「確かに友達からそう言われることはよくあります。……智也さん

は、どこの高校に決まったんですか？」

私が聞くと、

「ここからわりと近くにある木陽高校というところなんですけど、すごく偏差値高いんです。私の志望校もそこです。私は必死で勉強しているのに、智也はさっさと自分だけ推薦で合格しちゃったんですよ」

どうやら、加賀智也は勉強が良くできるらしい。

……木陽高校か。名前は聞いたことがある。

と、その時、十メートルくらい離れたところから、こちらに近づいてくる気配を感じた。その気配の持ち主の意識は、この屋敷に向いている。

この気配はおそらく加賀智也だ、と私は察し、ごくりと唾を飲む。

……どうしよう。会ってみようか。

そう考えたが、すぐに私はその考えを否定する。

……いや、駄目だ。加賀智と加賀治也の二人が、どこかに隠れている可能性も否定できない。

二人がこの屋敷以外のどこかに身を潜めていたとしたら、定期的に息子である智也と連絡を取っているはずだ。

加賀智也に私の存在を知られれば、二人にも自ずと私の素性がバレてしまう。そうすると、私は圧倒的に不利な立場に追い込まれる。

……だから、今はおとなしく退散するしかない。

「どうしましたか？」

私が急に黙ったからか、水西さんが不安げな視線を私に送る。

「あなたのお名前を　下の名前を含めて、もう一度教えてもらっても宜しいですか」

「え……ええ。水西綾華です」

「水西綾華さん、ですね。覚えておきます」

私は、彼女に微笑んだ。そして、ゆっくりと深呼吸し、彼女を正視した。

「私と会ったことは、すべて忘れてください」

私に告げられた瞬間、彼女は息を止め、硬直した。

彼女の身体が一瞬、ぶるりと震える。そして、彼女は無機質な声で、わかりました、と答えた。

それを確認すると、私は彼女に背を向けて、歩き出した。

後ろで、屋敷の玄関の扉が閉まる音がする。水西さんが、屋敷の中へ戻ったのだろう。

私は一瞬振り返り、屋敷の門を見つめた。しかし、私は名残惜しさを必死に振り払って、再び前に向き直った。

……彼女と友達になりたかった。だが、今は駄目だ。今は、我慢しなければならない。

「ケーキ買って帰ろうかな」

心に膨らんできた寂しさを覆い隠すように、訳もなくそんなことを呟く。

私と入れ替わるように、一人の人間の気配が屋敷へと近づいてくる。

私はそれを背中に感じながら、住宅街を後にした。

序章 三

私は自宅へ帰つてくると、先程買つて……いや、もらつてきたケーキを切つて皿に盛り付け、自室にそれを持ち込んで食べ始めた。食べながら、携帯電話で、実家　香我美家へと電話をかける。数十秒待つても出ないので、まだ帰ってきていないのかなと思い、電話を切ろうとしたとき、突如電話が繋がった。その瞬間に、

「お前、冷蔵庫にあったケーキ食つただろう！」

と怒鳴り声が聞こえてきて、私は反射的に携帯を耳から遠ざけた。
「……うん、食べたわよ」

正確には、今食べているのだけれどね。

……加賀家から引き上げた後、私は一度実家に帰った。そして、胸に複雑な気持ちを抱えたまま、なんとなく家の中の冷蔵庫を開いてみたら。そこには。

私は耳から離れた携帯を再び当てなおし、フォークで一口サイズに切ったケーキをぱくりと口の中に入れる。舌が蕩けるような甘さが口の中いっぱいに広がり、思わず唸ってしまった。

「食べたわつて、お前なあ。勝手に食うなよ、楽しみにしてたんだから。……ていうか何、今の唸り声は」

「なんでもないわ。……それより、どうして今日は家に居なかったのよ」

「ちよつと用事があったんだよ。鍵開けといたから、入れただろ」

「無用心にも程があるわよ。ポストに鍵置いとけばいいじゃない」

「急いでたんだから、仕方ないだろ。……何で俺を待たずに帰ったんだ」

「同じく、急用ができたから」

「置手紙ぐらいしろよ。携帯にも繋がらないし、一体何やってたんだ？」

「家庭訪問よ」

そう答えた時、調度ケーキを食べ終わり、私はごちそうさま、とフォークを置いた。

「家庭訪問？何だそれ。……せつかく夕飯の買い物、二人分してきたのによ」

「夕飯の買い物？……もしかして、今帰ってきたところなの？」

「そうだよ」

従兄弟がそう言った後に突然、「あれ……？」と何かに気づいたように声を上げた。数秒の後、「あー！」と物凄い悲鳴が電話越しに聞こえてきた。

「なんだ、これ！壁に穴開いてる！」

私は気づかれたか、と小さく舌打ちをする。

「お母さんが呼んでるからもう電話切るね。それと、今度からちゃんと鍵掛けなさいよ。……またね」

「おい、ちよつと待て……！」

従兄弟の引き留める声を無視し、私はそのまま電話を切った。

携帯電話を机の上にぽんと投げ出し、頭の中で、今日は貴重な収穫があったな、などと考える。従兄弟に会えなかったのは少し残念だけど、また暇を見つけて会いに行けば良いのだからそれほど問題ではない。

……今度行くときは、壁に穴開けたお詫びに、ケーキを持って行ってあげようかしら。

そんなことを考えながら、ケーキの皿を持って立ち上がると、私はお母さんの手伝いをしに台所に向かった。

夕食を食べ終わった後、私は食器を洗いながら、後ろで机を拭いているお母さんに向かって口を開いた。

「あのさ、私、志望校変えることに決めた」

後ろで、お母さんが目を丸くしてこちらに振り向くのが解る。

「そんなこと言っただってお前、今から変えて平気なのかい」

「大丈夫よ。今よりちよつとだけ上のランクの高校にするだけだから」

お母さんは呆れた様に肩を竦め、困ったようにテレビの前で新聞を読んでいるお父さんに視線を向けた。

「良いじゃねえの、母さん。美輪の好きなようにしてやれ」

「それで落っこつたらどうする気よ」

「この子に限って、そんなことがあるとは思えんよ。好きなようにしてやれ」

「……ありがとう、お父さん」

私がお父さんに笑顔を向けてそう言うと、お父さんは嬉しそうに笑みを返しながら、おうと片手を上げた。そんなお父さんの様子を見たお母さんが、

「全く。甘いんだからね、もう」

と呟きながら、肩を竦めた。

「で、どこにするんだい」

「それがね……私、葉月市の木陽高校に通いたいんだ」

お母さんが、啞然とした表情で私を見る。

「葉月市って言ったら、かなり遠いでしょう。ここからじゃ通えないじゃないの」

「だからね、その……一人暮らしさせて欲しいんだけど」

先程まで上機嫌だったお父さんが、一人暮らしと聞いた途端、いきなり顔を蒼白にさせて、こちらに振り向き、「絶対に駄目だ！」と叫んだ。

私はその後、週末には実家に帰ってくることを理由にして二人を説得し、何とかお母さんの了解を得る状態にまで漕ぎ付けた。断固反対していたお父さんも、最後には、肩を落しながら、まあ仕方がないと渋々了承してくれた。

……こうして、私は木陽高校を受験することになった。志望校のラ

ンクが上がったことにより、今までより多くの時間を勉強に割かざるを得なくなった。

受験勉強の最中、加賀智也が一体どんな人物なのか、あれこれ想像することが度々あった。

勉強が忙しい時には、加賀智也は推薦で合格してるから、今頃は綾華さんと一緒に楽しく過ごしているんだろうなあと訳もなく想像を巡らし、無性に彼が羨ましく思えてくるのだった。

季節は春になり、私は無事に木陽高校に合格することができた。お母さんはあらまあと笑いながら、喜んでくれた。お父さんはいうと、少しがっかりしてたみたいだけど、おめでとうと合格を祝ってくれた。

私は木陽高校に入学し、そこから割りと近くに位置するマンションで、一人暮らしをすることになった。入学式当日、クラスが発表され、私は掲示板の前で自分の名前と、加賀智也の名前を探した。私はC組で、加賀智也がD組。綾華さんの名前も見つけた。彼女はF組だった。

新学期が始まり、晴れて私の高校生活がスタートした。生活自体は中学とあまり変わらないような印象を受けたが、前より幾分かマシになったのも事実だと思う。学食があること、物品の持込の規制が緩くなったことなど、色々挙げられるが、何より友達が増えたことが、一番の良き変化と言えるだろう。ただ、高校になってから、男子に頻繁に声を掛けられるのはどうしたものか。もしかしたら、この高校の男子生徒は、人懐っこい性格の持ち主が多いのかもしれない。

日々は忙しく進んでいき、新学期が始まってから、早くも一ヶ月が過ぎた。私は個性豊かな友人達に囲まれて、それなりに高校生活というものを楽しんでいた。そんなある日の放課後、図書館へ行くと、窓際の席で静かに本を読んでいる男子生徒の姿を見つけた。私の胸が、どくと鳴る。

ややウェーブの掛かった長い髪が、窓の隙間から入ってきた微風に吹かれて、さらさらと柔らかく揺れている。その横顔を見るとなかなか整った顔立ちをしていて、美男子と呼べなくもない。

今までずっと見ていただけで、話しかけたことはなかった。けれど、いずれ話しかけようとも思っていた。

……今、話しかけてみようか。

そう思った途端、もう一度どくと胸が跳ね上がった。

復讐。

そんな、学校生活には似合うことのない言葉が、私の頭に浮かんだ。

私は震える腕を押さえて、ゆっくり彼へと近づいていった。彼はこちらに気づいていないのか、黙々と本を読んでいる。私は、彼の前に立った。

すると、ようやく彼は本から顔を上げた。そして、私を訝しげに見据えた。

私は小さく息を吸う。そして、思い切って口を開いた。

第一章 一

どんだん、と遠くから扉を叩く音が聞こえてきて、俺は目を覚ました。掛け布団を跳ね除け、すぐさま起き上がる。そして、枕元に置いてある目覚まし時計を見やった。

六時五分。

……いつもより少しばかり遅く起きたみたいだ。俺は布団を畳み、制服に着替える。依然として、玄関の方から激しく扉を叩く音が聞こえてくるが、別段気にならない。

着替えが終わると、俺は自室を出て、ゆっくりとした歩調で廊下を歩く。

窓から眩しい朝の光が、板張りの廊下に、差し込んでいる。透明なガラス窓の向こうに、広い庭が広がっていて、その外観は日本の静かな朝にぴたりだった。この庭の景色は、日頃から俺の心を満喫させた。広い日本屋敷に一人暮らしというのは、掃除の手間ばかり掛かってしまつて、非常に効率が悪い。しかし、このような広い庭を独り占めできることを考えれば、そんな不都合も些細なことのように思えてくるのだった。

玄関に近づくにつれ、だんだん例の音が大きくなっていく。長い廊下を歩き、ようやくのことで玄関に辿り着くと、俺は扉の向こうに居るであろう人物に声をかける。

「今開けるから、待ってるよ。朝から五月蠅いぞ、綾華」

「だって、早くしないと遅刻しちゃうじゃない！」

甲高い悲鳴が、返ってくる。俺は眉をしかめながら、扉を開けた。そこには、焦った表情をした綾華の姿があった。

「遅刻つて、お前。……今は何時か解つてて言ってるのか」

俺は呆れながら、そう問う。

「七時でしょう！？早くしないと遅刻だよ、もう！」

綾華がずんずんと屋敷の中へ入っていく。俺は、綾華が横を通り

過ぎる際、悪戯っぽく笑いながら、口を開く。

「残念だったな、まだ六時十五分でした」

「え、嘘……」

綾華が、啞然とした表情で、こちらに振り向く。

「確か、綾華の部屋にある目覚まし時計、狂ってただろ。こないだ買い換えろって言ったのに」

俺は笑いを噛み殺しながら、そう言った。

「そうだった……すっかり忘れてた」

今まで焦っていた自分が馬鹿らしく思えたのか、綾華が大きく肩を落とす。

眼前の少女、水西綾華とは長い付き合いで、彼女は俺の幼馴染であり、また俺の親友でもあった。俺が小学二年生の時、俺の両親が死に、その後すぐに、水西家がこの屋敷の隣へ引っ越してきた。その時の俺は、大切なものを失った悲しみで心を固く閉ざしていた。そんな俺を救ってくれたのは、他でもない綾華達だった。それ以来俺は水西家と本当の家族のように接してきて、綾華とは兄弟のように親しい仲になったのだ。

綾華は台所に入ると、さっそく朝食を作り始めた。今日の朝食当番は綾華だ。だから、俺は綾華が準備している間に、ゆつくりとコーヒーを飲みながら寛ぐことができる。

「そつえば、おばさんは？」

台所で淡々と作業している綾華の背中を見ながら、俺は聞いた。

「お母さんなら、まだ寝てるわよ。昨日遅くまで仕事だったから」

「そつか……おばさんも、頑張るなあ」

綾華のお母さんである和子さんは、パートに出ている、夜遅くに帰ってくることが多いのだ。大抵、次の日は昼まで起きてくることはない。

働き者のおばさんに感心しつつ、コーヒーを一口飲んだ時、スーッ姿のおじさんが居間に顔を出した。

「お早う、お父さん」

台所に居る綾華が手を休めて居間に振り返り、おじさんに笑いかけて言った。

「……おはよう、綾華」

とおじさんも綾華に微笑む。

「おはよう、おじさん。今日の朝は、ゆっくりしていけるみたいだな」

「この頃、毎日五時起きだったから、ゆっくり寛げるのは久しぶりだ」

おじさんはそう言って俺の正面の席につくと、手に持っていた新聞を広げた。

おばさんが居ないことを除いては、いつも通りの朝の風景だった。ここに居る二人は、俺の本当の家族ではないけど、単なる隣人という関係を越えて、俺達は家族のように親しく付き合ってきた。朝は、こうして俺の家に集まって朝食を摂る事になっている。だが、各自のスケジュールが忙しい為か、なかなか四人が揃うことはない。大抵食卓に着くのは俺と綾華の二人になることが多かった。

食事を共にする習慣が、一人身である俺への気遣いであることは良く解っている。幼い頃から一人ぼっちだった俺を、水西家の人は本当の家族のように慕ってくれた。その恩は一生尽きることがないだろう。

「智也、そう言えば期末試験はどうだったんだ？」

おじさんがふと、新聞から顔を上げて言った。

「期末試験？ああ、ぼちぼちできたよ」

「あれで、ぼちぼちなのか？」

綾華が台所から、俺を非難するように声を上げた。

「何だ、綾華はできなかったのか？」

おじさんが台所の方を見やって、顔を顰めた。

「できたわよ、それなりに。ただ、智也には敵わなかったけどね」
そう言った綾華は、心なしか、残念そうだ。

昨日の学校での出来事が思い起こされる。

四限目が終わり、休み時間になった時のことだ。

期末テストの全教科の結果が発表されて、教室がその話題で騒然となっている時、綾華が嬉しそうな表情をしながら俺の教室に駆け込んできた。

「どうした、綾華」

俺が怪訝な顔をしてそう聞くと、綾華は得意げに答案用紙を俺に差し出した。

「どう？」

「どうって、何が」

「……ほら。私、化学のテスト、八十五点取ったんだから」

「お……確かに」

答案用紙の右上の方に、八十五点と記され、その横にG R E A T！と大きく文字が書かれてある。さらにその横に、さすが綾華ちゃんね、という先生のコメントが。

「綾華、今回はかなりできたな」

「うん。結構勉強したからね」

「偉いぞ、綾華」

俺が褒めると、綾華は照れくさそうに笑った。

「で、智也はどうだったの？」

綾華が興味深げに身を乗り出して、聞いてきた。

「あ、俺？九十四点だよ」

俺がそう言った瞬間、綾華の表情が固まった。

「そうなんだ。九十四点、か……」

綾華ががつくりと肩を落としながら教室を去っていく。俺は慌ててその後を追ったのだった。

「智也は頭が良いからな。……まあ、綾華も、それなりにできたなら良かったじゃないか」

と、おじさんは新聞に目を通しながら、可笑しそうに笑った、

「だけど、今回ばかりは、悔しかったわ」

台所から出てきた綾華が、そう言っただけで肩を竦め、朝食の皿を机の上に並べ始めた。俺は席を立ち、綾華を手伝う。

朝食を済ませると、俺達三人は揃って屋敷を出た。

「それじゃ、おじさん。仕事、頑張つて」

「精一杯やつてくるさ。……今日は、私も母さんも、帰りが遅くなりそうだから、夕飯は二人で適当に食べときなさい」

「わかったわ。行つてらっしゃい、父さん」

綾華がそう言つてにつこりと笑うと、おじさんがこれ以上ないくらい嬉しそうな表情を浮かべる。

「行つてくるよ」

おじさんは嬉しそうに笑いながら、折りたたみ自転車を快活に漕いで、遠ざかつていった。俺はその背中を見送りながら、苦笑した。おそらく、おじさんのあの笑顔は、会社に着いてもしばらくは消えることはないだろう。おじさんは普段から厳格で真面目な人だけど、綾華にだけはとことん甘い癖がある。そんなおじさんの様子を見ると、『家族』ってものが垣間見えて、俺は微笑ましく思ふのだ。

俺達は、歩き出した。

夏の陽光が朝の住宅街に眩しく降り注ぐ。だが、幸いなことに、今の時間帯はそれほど暑くはない。朝の人通りの少ない町並みは、清々しささえ感じられる静謐な空間だった。

「夏休みの予定、決めた？」

綾華が、突然そんなことを聞いてきた。

「夏休み？」

俺は、自分が夏休みの計画をこれっぽっちも考えていなかったことに今更気づく。

そんな俺の様子に、綾華が呆れたように溜息を吐いた。

「健全な高校生が、夏休みを忘れるなんて」

「なら、綾華はもう考えたのか？」

「うん、一応ね。……今年の夏休みは、色々ありそうよ」

綾華がそう言って目を伏せた。何だか綾華の声音が、不安の色を帯びていたように感じられる。

「どうした？何か、嫌なことでもあるのか」

俺が綾華の表情を窺いながらそう言っていると、

「うつん……なんでもないわ」

と、綾華が笑いながら首を振った。綾華が無理をして笑顔を取り繕ったのは明白だったが、俺はそれ以上何も聞かなかった。綾華がなんでもないと云うのなら、あまり深く追求する必要はないだろう。無理に彼女の心の深くに踏み込むのは、躊躇われた。

「今年の夏休みも、どこかへ行くか？」

俺がそう言っていると、綾華の顔から取り繕った笑顔が消え、本来の明るさを取り戻す。

「そうねえ……今年は、二人でどっかへ行く？」

「二人か……それもいいな」

俺は、結構人見知りが激しい性質だ。今までに、友人を誘ってどこか遠いところへ出かけたり、旅行へ行ったりしたことなんて、数えるほどだ。だが、綾華みたいな、兄弟のように気の置けない相手となら、不思議といろんな所へ出かけてみたくなる。

「去年は九州で、その前が確か四国だったよな」

「今年は、沖縄辺りでどう？」

「沖縄か。それもいいな。……まあ、どこへ行くにしろ、早く予約入れないとな。今度、観光のパンフレットをもらって……」

「ねえ、智也……あれ！」

俺が最後まで言い終わらないうちに、綾華の声によって遮られる。綾華は突然俺の肩を掴むと、ぐいっと引き寄せて前方を指差した。

「何だ……？」

綾華が指差す方向に視線を向ける。

茂みの中から小さな蛇が顔を出して、こちらを凝視していた。

「……こっちを睨んでるよ」

綾華が怯えた声を上げると共に、俺の肩を掴む綾華の手の力が一層強まる。

「大丈夫だ。蛇は瞬きをしないから、睨んでいるように見えるんだよ」

「そうなの？」

「……ゆっくりと横を通り過ぎれば、問題ないさ」

俺がそう言っただけで歩き出そうとした時、蛇が突然茂みから抜け出した。

綾華が短い悲鳴を上げる。

蛇はアスファルトの上を這って、ゆっくりとこちらに近づいてくる。

「……こっちに来るよ！」

綾華が、俺の腕を引いて後ずさろうとする。

「大丈夫だ。問題ない」

俺は、綾華の手を腕からそっと振り解き、前方の蛇を見る。

蛇の目を見つめながら、俺は心の中で呟く。

行け。

蛇が一瞬びくりと身体を震わせて、動きを止めた。

そして、硬直したまま、こちらをじっと見つめる。

だが、数秒の後に蛇は身を翻して、元の茂みへと戻って行った。

「……びっくりした」

蛇が去っていった方向を見つめながら、綾華が大きく息を吐いた。

「ここら辺、蛇がやたらと多いのよね。今週になってから、何度見たかしら」

「まあ、それほど凶暴な奴は居ないし、こっちから手を出さない分には平気だろ。用心に越したことはないけどな」

俺達は気を取り直して、再び歩き出した。話題を旅行へ戻し、あれこれ二人で提案しあっていると、あっという間に大通りへと差し掛かった。生徒達がぞろぞろと学校の方へ歩いていき、俺達もそ

の中に加わった。

周囲では生徒達の澆刺とした声が飛び交っていて、俺達の何を何人もの生徒が通り過ぎていく。ふざけあう男子の集団、おしゃべりに花を咲かせる女子達、中には仲良く手を繋ぎながら歩くカップルの姿もある。

どれもこれも、幸せな風景だった。

その風景の中に俺自身が混じっていることを知ると、胸に微かな幸福感を覚える。

「綾華ちゃん、おはよう」

正門の近くまで来て、突然後ろから声が掛かった。振り向くと、一人の女子生徒が綾華に手を振りながら走ってきて、俺達の横に並んだ。

「坂山さん、おはよう。剣道部の朝練？」

綾華が女子生徒に笑みを返して、言った。

「そうなのよ。毎朝、早く起きなくちゃいけないから、きついんだよね、ホント。……智也君も、おはよう。期末試験、凄かったらしいね。私、びっくりしちゃった」

話しかけられるとは思っていなかった俺は、返答に少し戸惑った。
「……あ、うん」

……自分でもそっけない返事だと思うが、特に言すべき言葉が見つかからない。

一瞬、場に気まずい沈黙が流れる。

「……じゃあ、綾華ちゃん。朝練、頑張ってね」

「うん、坂山さんも、頑張って」

女子生徒は軽く手を振ると、体育館へと走って行ってしまった。

「智也」

綾華が、怒ったような表情でこちらに振り向く。

「何よ、今の」

「……仕方ないだろ。俺に社交性を求めても無駄だよ。こういう性質なんだから」

「また、そんな捻くれた事を言つて……！」

「そんなに捻くれてるかな、俺は。……俺は綾華とが一番喋りやすいんだよ」

「……ん」

俺の言葉に、綾華が口籠る。

「何、赤くなつてるんだよ。そこは、照れるところじゃないだろ」

「……もう良いわ、朝練行つて来る」

「ああ。行つてらっしゃい」

綾華は俺の顔を見ながら呆れたように一つ溜息を吐くと、部室棟へと歩いていった。

俺はその背中を見送ると、そのまま校舎へと向かった。

綾華と俺は、正反対のタイプの人間だ。綾華は明るい性格をしていて、人望も厚い。俺は寡黙で、人付き合いがとことん悪い。そんな俺達がどうして親友の間柄になれたのか。自然の成り行きもあるかもしれない。だが、おそらく、根本的な部分で俺達は似たもの同士だからだ。表面上の性格は全く正反対だけど、お互いにどこか似た面を持ち合わせている。……とはいっても、その”似た面”が一体何なのか、俺自身未だに解らないのだけだ。

第一章 二

放課後の図書室。俺は窓際の席に一人腰を下ろしている。

窓から夕日の光が差し込み、手元にある本が、自分の手の平が、オレンジ色に染まっている。息を吸えば、図書室に立ち込める本の独特な匂いが鼻を刺激した。

ここで過ごす時間はゆったりとしていて、どんな些細なことでも感じ取れる余裕を俺に与えてくれた。

だから、俺はこの場所が好きだった。

静謐な空間に居ると、普段、雑踏の中では耳にすることのない己の心の声が、聞こえてくる。

その内容は様々だ。

死んだ両親に対する想い、人生の回想、綾華のこと、おじさんのこと、おばさんのこと。

言ってしまうえば、考え事をするのに向いているのだ、この場所は「こんな所でずっと本読んで、よく飽きないわね、あなたも」

聞き慣れた、落ち着いた女子生徒の声がした。俺は本に目を落とすまま、口を開く。

「飽きる、飽きないの問題じゃないだろ。俺は静かな所が好きなんだ」

「ふうん……ねえ、何読んでるの？」

「ちよつと、おい」

抵抗する間もないまま、読んでいた本を取り上げられる。俺はようやく顔を上げ、前方に立っている女子生徒を見据えた。小柄な身体に、茶色に染めたショートヘアの髪。その容姿は、一年の頃から、何ら変わっていない。

「『兵法者を語る』、ねえ。あなたも、こんなの読むんだ」

「特に読みたいのがなかっただけさ。他のおすすめ図書は、読み尽くしたし」

手持ちぶたさになった俺は、窓の外の景色に視線を移した。

「おすすめ図書って、確か、図書委員の人が紹介するアレよね。こないだ恋愛小説読んでたのはそういう訳か」

「あれは半分くらい読んでやめたよ」

俺がその小説を読んでいる時、同じ机に座っていた女子生徒三人組が、しきりにこちらを見ながらくすくす笑っていたのだ。それで、気分が悪くなつて読むのをやめた。

「……そうそう、期末の成績、良かったらしいじゃない」

「香我美だって、かなり良かったんだろ」

俺は勉強自体は好きでも嫌いでもないが、割りと興味があることも確かだ。だけど、他人との成績の比較についてはこれっぽっちも関心がなかった。

「……あなたって、全然見栄を張らないのね」

香我美は、可笑しそうにくすくす笑った。

「話変わるけど、夏休みはどうするの？綾華さんとどっか行ったりする？」

「まあな。だけど、あまり出かける余裕はないかもしれない。……

今年の夏休みはやることあるから」

俺は窓の外をぼうつと見ながら、そんな言葉を口にした。

「やることって、何よ。ボランティアでもやるの？」

「……そういうのは嫌いじゃないけど、残念ながらやる予定はないな。俺がやるうとしてっている事は、もっと義務的なもので、挑戦を強いるものだ」

「……義務的で挑戦を強いるもの、ねえ。聞いている分には、格好良いけど。……回答を期待せずに聞くわ、その『やる事』って何なのよ」

「秘密だ」

「……ふーん」

香我美は面白いものを見るような目で俺の顔を眺めた後、

「まあ、いいや。頑張ってるね」

と、ぼんと俺の手元に『兵法者を語る』を置き、くるりと背を向けた。そして、そのまま颯爽と図書室を去っていった。

「何しに来たんだ、あいつ」

俺は彼女が去っていった方向を見つめながら、首を傾げるのだった。

今日は、綾華の部活が終わるのが遅くなりそうだった。何せ、綾華が所属するのは水泳部だ。真夏が舞台であると言ってもいい。これから夏休みに入るから、綾華も随分忙しくなるだろう。俺は綾華との待ち合わせを諦め、図書室が閉まると、すぐに学校を後にした。帰り道にスーパーに寄って買い物を済ませてから帰宅すると、さっそく夕飯の仕度に取り掛かる。

今日の献立はカレー。簡単かつ美味なので、俺のお気に入りの料理だ。

八時ごろになって、やっと綾華が帰ってきた。その頃には、俺の手作りカレーはすっかり出来上がっていた。

「良い匂いね。今日はカレーかぁ」

玄関から綾華の澀刺とした声が聞こえてくる。俺はカレーを皿へよそり、冷蔵庫から冷えたサラダを取り出して、それらをお盆に載せる。そして、お盆を持って居間の隣にある和室へと向かうと、調度綾華が居間に入ってくる。

「今日は、和室で食べるの？」

「座敷の方が、寛げるからな。飯にするから、早く来いよ。お前も、泳ぎまくって腹が空いてるだろ」

そう言っ、座敷に上がる。「はいはい。すぐ行きますよ」と綾華が快活な声を上げる。洗面所へ走っていく綾華の足音を耳にしつつ、俺はお膳の上に、淡々と皿を並べていく。

皿を並べ終わると、俺はそのまま座布団に座り、コップにお茶を注いでそれを口にする。目の前には、匂いを吸うだけでも唾液が出る、特製大盛りカレーがある。綾華が和室に入ってきてそれを目に

し、おおつと声を上げる。

「美味しそう。でも……太りそう」

「大丈夫だ。お前がそう言うだろうと思って、二皿分しか作ってない。お代わりはなしだ」

「それはありがたいけど、ちょっと残念ね」

綾華が、俺と向かい合わせに座る。俺はそれを一瞥した後、両手を合わせて「頂きます」と言って、さっそくカレーに手を掛けた。綾華もそれに倣って、女子とは思えないようなスピードと食べっぷりでカレーを平らげていった。

「……なあ、綾華」

俺は一つ思い浮かぶことがあって、スプーンを持つ手を止めた。

「……何？」

綾華がスプーンを銜えながら、上目遣いに俺を見る。

「俺の知り合いに、香我美って奴が居るんだけどさ」

「香我美さん？ああ、知ってる知ってる。頭の良い子でしょ」

「そうだ。お前、あいつと知り合いなのか」

「ううん。話しかけたことなんて、ないわよ」

「そうか。あいつ、会う度に綾華のことを聞いてくるんだよな」

「そうなの？私、知り合いが多いからなあ。たぶんその子も、友達から私の事聞いたんだと思うよ」

「やっぱりそうかな。でもあいつ、友達はそんなに居ないような……」

「…」

俺が、どうしたものかと考えていると、ふと、綾華がじつとこちらを覗き込んでいる事に気づく。

「何だよ」

「智也、その子と友達になりなよ」

綾華が身を乗り出し、輝くような明るい表情を見せて言った。俺はそんな綾華の様子を見て、苦笑しながら肩を竦める。

「俺にとって香我美は、もう友人の部類に入ってると思うけど」

「そうじゃないでしょ。もっと親交を深めてみたらどう？って意味

よ」

「これ以上、その『親交』とやらが深まるかどうか。……俺が言えた事じゃないが、あいつ、結構変わってるから」

「でも、智也に話しかけてくるってことは、智也に興味があるってことじゃない」

綾華の言うとおり、俺に興味を持つてるのは確かだ。ただ。

まるで実験材料を探し当てた科学者のような目で、香我美は俺を見てるのだ。面白がってると言っても良い。だけど、不思議と俺はあいつが嫌いではない。

「仲良くなつて、今度私に紹介するのよ。……約束だからね」

「……約束はしない、とだけ言っておく」

俺はさっさと話を切り上げ綾華の詰問から逃れようと思い、スプーンを握り直して食事に没頭することにした。

夕食を終えて、九時頃まで居間で綾華とテレビを見ていたが、綾華の家から車の停車音が聞こえると、綾華はおやすみと屋敷を出て行った。どうやら、おじさんが帰宅したらしい。

「……さてと」

俺はテレビを消して、ソファーから腰を上げる。

綾華が居なくなり、屋敷は途端に静まり返る。まるで、この屋敷だけが外界から隔離されて、時間を止められているかのようなのだ。

夜になると、この屋敷はゆっくりと闇の性質を帯び始め、屋敷内の空気が変わる。それは常人には気づくことのできない僅かな変化だ。こうして闇の住処となった屋敷の中に居ると、俺自身にも変化が訪れる。徐々に血が疼き始め、平凡な男子学生である『俺』は影を潜めて、”呪術師”としての『俺』が顔を出す。それは、知られざる俺の一面だ。

加賀家には、代々『呪術』が伝えられてきた。

ここでいう『呪術』とは、超古代から伝えられてきた超常の力のことを指す。簡単に言えば、超能力だ。

一般に知られている『呪術師』の種類は、極めて広範囲に渡る。例えば、“シャーマン”だ。霊的な存在を自らの身体に宿らせて、超常の力を発揮することができる。神のお告げがその典型だ。また、自らの魂を肉体から離脱させて霊的存在と接触するという、脱魂の術を使える者もある。

もう一つ、著名な例を挙げると、それは“雨司”だ。雨司とは、“雨乞い”を行う呪術師のことを指す。雨乞いとは、人が水不足に陥った時、呪術的な方法によって雨を降らすことを言うが、この雨乞いの呪術は種類が非常に豊富で、代表的なものに、歌や踊りなどの儀式がある。

これら、著名な呪術と、加賀家に伝わる呪術とはその性質上、種類が全く異なっている。加賀家の呪術は、闇の要素が強い。そのほとんどが、人に攻撃を加える、最悪の呪術と言っても良い。人を呪い殺したり、病気を煩わせたりするのだ。

俺の祖先は危険な呪術を生み出し、それを代々伝えてきた。何の為に、こんなものを作る必要があったのか、呪術師である俺にさえはつきりとは解らない。

俺は生まれたときから、呪術師としてあるべく、両親に育てられた。三歳までは、おとぎばなしを聞かされる感覚で、加賀家にまつわるエピソードを毎日聞かされた。夜、寝る前には、絵本　おそろくそれも呪術に関する内容だったろう　を母親に読まされた。苦痛を感じたことはなかった。

神秘的で、ワクワクする毎日だった。

だが。

俺が四歳になった時のことだ。ある日、俺は両親に腕を引かれ、地下室に連れて行かれた。地下室は、この屋敷の中に隠されていて、誰かに発見されることのないように呪術が施されている。地下室には明りがなく、真っ暗だった。入り口に入ると、俺は両親に手を引かれ、暗くて足元が見えない中、階段を下りていった。

そして　地下室の光景を目の当たりにし、俺は恐怖で真っ青に

なった。

地面の上に、何百もの蛇が這いずり回っていた。まさにそれは、蛇の海だった。

俺はすぐに悲鳴を上げて逃げようとするが、非情にも両親は俺の背中を押して、突き落とした。俺はその海へと落下した。

俺は絶叫して、必死で足掻くが、身体には次々と無数の蛇が巻きついてくる。

頭が噛まれ、腕が噛まれ、足が噛まれた。そして、数時間、数日、酷い時には数ヶ月、両親は俺をその地下室に閉じ込めて、蛇の海の中で溺れさせた。

俺の心が壊れるのは、あっという間だった。俺は全てに対し無関心になり、蛇に身体を噛まれようが、首を絞められようが、ただされるがままになった。

永遠と地獄のような日々が繰り返され　俺は五歳になった。すると、両親の態度が急変した。

”もう地下室には行かなくて良い。その代わり、次は他の訓練に励みなさい”

両親は平然と言った。

つまり　地獄といえるあの拷問の日々が、両親にとっては、ただの『訓練』でしかなかったのだ。

俺は、空っぽになった心で、ぼんやりとその事を不思議に思った。何故、二人は、自分の子供にあんなことを平気でしたのか。

自分の息子をいじめて楽しんでいるのか、と考える。だが、二人の顔をじっと観察してみるが、どうもそうは見えない。むしろ、訓練について語る両親の顔は、とても幸せそうだった。

そして、俺はその小さな頭で理解した。

父さんと母さんは、壊れているんだ。

それを理解した時、俺は何とも言えない感情を抱いた。それはきつと、両親を哀れに思う気持ちだったのだと思う。

皮肉なことに、その時から、壊れたはずの俺の心は、再び人とし

ての感情を取り戻し始めた。

淡々と両親から呪術の訓練を施され、それを当然のように俺は受け入れる。そんな日々が続いていた。

だが。俺が、小学二年生になった時のことだ。

ある日の夕方、俺は屋敷に一人で留守番をしていて、両親が帰るのを待っていた。

血のように真っ赤な空が印象的で、俺は窓からずっとそれを眺めていた。そんなとき、裏口の扉を誰かが叩く音が聞こえた。

俺は廊下を忍び足で歩き、裏口の扉に近づいた。すりガラスに、二つの人影が映っている。俺は誰、と呟く。すると、智也か、と父親の声がした。いつもと変わらない無機質な声。俺は恐る恐る戸を開ける。

そこに、立っていたのは 血みどろになった父さんと母さんの姿だった。

そこから先はよく覚えていない。

覚えているのは、二人がそのまま裏口の玄関で倒れて絶命したということと、最期に俺の頬を撫でて死んでいった母さんの冷たい手の感触。そして、二人の死骸を前にして、俺はずっと泣き続けたということだ。

俺は悲しくて悲しくて、涙が枯れるまで泣き続けた。

憎い存在が消えたのだから、嬉しいはずなのに、俺はどうしてそんなに涙したのだろうか。

そう。俺は愛していたのだ、二人のことを。

自分でも気づかなかった。失ってみて、初めて気づいた。

二人は狂った精神の持ち主で、俺はそれが堪らなく憎かった。だけど、俺はそんな彼らを心の奥底では、愛していた。

泣き疲れた俺は、ぼんやりと目の前の死骸を見る。そして、決心した。

二人を殺した人間を、絶対に殺してやる。その家族もろとも。それは、二人の遺言でもあった。

” 私達の仇を討て”

最後に、両親はそう言い残して逝った。

俺は、喜んでその望みを受け入れようと思った。大切なものを失って、俺の心はぼつかりと空洞ができた。その空洞に流れ込むようにして、新たな憎しみが俺の心に広がった。

……それが、両親が死んだ今でも、俺が呪術師をやっている理由だ。いつか来る復讐の時までに、俺は力を蓄え続け、策を練り続ける。

俺は居間から出て、裏口に向かった。

裏口は、ひっそりと夜の闇に隠れていた。窓から差し込む月明かりが、玄関を薄つすらと照らしている。

玄関の前でしゃがみ込み、二人の死骸があつた床の上を手でゆつくりとさする。

血は綺麗さっぱり拭き取られて、消されている。死骸はとうに処分されている。

ただ。

一つだけ、依然として消されていないものがあつた。

俺はゆつくりと目を閉じる。

母さんの悲痛の叫びが。

父さんの悔恨の嘆きが。

……この耳に、聞こえてくる。

俺はゆつくりと目を開けた。

この場所には、二人の強烈な思念が残っている。二人が唯一残っていたのは、この、想いの欠片だ。

俺はそれを大事に胸に抱え、しばらくその場を動かなかった。

第一章 三

石段を一段下りる度、地下室に足音が大きく木霊する。薄暗くて足元が見えない。しかし、一段一段の間隔を脚が覚えていて、決して足を踏み外すことはない。

外界と切り離された、閉鎖的な空間。そこに漂う甘い空気が、意識を法悦へと誘う。だが、俺の意識は、押し寄せる快感をいとも容易く退け、極めてクリアな状態を保っている。

階段を下り切ると、狭い地下室が壁掛けのランプの光によってぼんやり浮かび上がっていた。俺は部屋の隅の暗がりには視線を向けて、「おいで」

と声をかけた。縄を石畳に擦り付けるような音が地下室に響き、細長い影が壁に浮かび上がる。俺が両腕を広げると、それはするすると近づいてきて、俺の片腕に絡み付いた。

「……良い子だ」

まるで我が子を抱いているような愛しさが胸に広がる。そんな俺の感情に呼応するかのように、白蛇が嬉しそうに身をくねらせる。

「さあ……そこに座って」

人を相手にするように、そっと優しく声を掛けると、白蛇は大人しく俺の腕から長い身体を解き、地面へトグロを巻いて座った。

俺は白蛇と向かい合って、座禅する。ひんやりとした地面の感触が尻を撫でる。

俺は一つ深呼吸した後、目を瞑り、意識を内界へと集中させた。だんだん意識が深い闇へと沈んでいき、やがて完全に音が消こえなくなった。

一通り訓練を終えると、俺は目を開いた。いつもながら、堪えるな、と思う。精神を過剰に集中させたせいか、身体は汗だくだ。

俺は額に滲む汗を腕で拭う。

「……お疲れ。もう下がって良いぞ。今日の日課は終了だ」

俺は息を切らせながら、眼前の蛇に微笑みかける。すると、白蛇が俺に近寄ってきて、再び俺の身体に絡み付いた。

「ん？……どうした」

蛇の身体は冷たくて心地良く、高まった体温が次第に冷めていった。

「気を遣ってくれてるのか。ありがとな」

俺が微笑みながらそう言うと、蛇は首をこちらへ擡げてシューと口から音を立てた。俺がよしよし、もう行って良いぞと身体を撫でると、嬉しそうに身をくねらせながら俺の身体から離れ、暗がりへと戻っていった。

今日の日課はこれでお仕舞いだ。

こうして自主的に呪術の鍛錬は続いている訳だが、鍛錬の厳しさは、両親が生きていた時の半分にも満たない。それは、単に呪術が身に付くようになって、それほど苦痛を伴うことがなくなったからかもしれない。だが、当時俺が両親から強制された訓練は、やはり凄まじいものだった。今でも、その記憶を思い出す度に、俺は恐怖に戦慄する。

毎日夜になると、この地下室で俺は呪術の鍛錬を一時間程度行うことにしている。この屋敷に馴染んでいる綾華でさえ、まさか、地下室があるなんて思っても居ないだろう。発見される心配は皆無に等しい。人目につかぬよう、地下室には厳重に呪術が施されている。ただし、発見される恐れがないのは、通常の人間であればの話。呪術師なら発見することは不可能ではない。

だが、呪術師がこの屋敷に侵入してくることはまずないと思ってい。俺が呪術師であることは、俺以外に誰も知らないからだ。

復讐を成し遂げるため、俺はこうして密かに呪術師として日々鍛

鍊を続け、復讐の準備を淡々と進めているが、未だに犯人の正体は判明しておらず、その手がかりらしきものは何も残っていないかった。一つだけ手がかりらしきものがあるとすれば、両親が息を引き取った際の記憶だった。

しかし。

その時の記憶がどういう訳か曖昧で、年月が経つことにますます薄くなっていく。

どうにかならないか　と俺は首を捻って考えた。そして、ある考えを思いついた。

俺はある霊能者に、依頼を持ちかけた。

今日の深夜零時に、その霊能者が家に来る手筈になっている。

今日は訓練を早めに切り上げることにして、地下室の隅に向かって「またな」と一声掛けた後、俺は石段を登った。

登っていくと、階段は途中でぶつ切り切れて、その先は行き止まりになっている。天井は低く、俺は中腰の姿勢で立つ。そして、天井を手で押す。すると、ぽっかりと蓋が取れて、俺はその隙間から外へ出た。

外に出ると、そこは俺の部屋だった。地下室の澱んだ空気から開放され、俺は大きく深呼吸しながら背伸びをした。俺の部屋の畳の下には、地下室への入り口が隠されているのだ。入り口を念入りに施錠した後、俺はその上に元のように畳を敷いた。

第一章 四

時計が真夜中の零時を回った頃、裏口の扉が叩かれる音が廊下に響いた。

「来たか」

客室にいた俺は腰を上げ、廊下へ出た。薄暗い中を慎重に歩いていき、裏口まで来るとそつと戸を開けた。

そこには、スーツ姿の女性が、立っていた。歳は二十代後半といったところか。前髪を左右に分け、そこから覗く顔は凜々しい。ぱりつとしたスーツを長身の身体に纏い、まさに仕事に生きる女性、という言葉がしっくりくる。

女性が、ゆっくりと頭を下げる。

「天宮 菜月さんですね？」

俺が小声でそう囁くと、女性がはいと頷いた。俺は「どうぞ」と、中に入るよう促した。天宮さんは軽く頭を下げ、屋敷の中へと入る。彼女が中に入ると、俺はそつと静かに戸を閉めた。

「こつちです。暗いので、気をつけて」

俺が薄暗い廊下を先導して歩き始めると、後ろに続いていた天宮さんが突然ぴたりと足を止めて、玄關に振り返った。

「どうしましたか……」

俺がそう言つて振り返ると、天宮さんは「いえ、お気になさらずに」と苦笑しながら再び前を向いた。

「そうですか。……行きましょう」

俺がそう言つと、彼女は無言で頷き俺の後に続いた。廊下の角を曲がると、奥の方で客間の一室だけが煌々と明りを点らせている。俺は客間の前まで来て、戸を開けた。俺が手仕草で入るよう促すと、彼女は失礼します、と座敷に上がる。

「どうぞ、座ってください」

俺がそう言つと、彼女は座布団の上に座った。俺は彼女と向かい

合わせに座り、予め用意しておいたコップにお茶を注いで手渡した。ありがとう、と天宮さんがコップを受け取る。喉が乾いていたのか、彼女は一気に飲み干した。そして、コップを口から離すと、ふうと小さく息を吐き、俺を正面に見据えた。俺は彼女を見返し、口を開く。

「屋敷に入ってから、この部屋に来るまでに、どこかに異常がありませんでしたか？もう既にお気づきだとは思いますが」

「……ええ。ありました」

天宮さんは小さく頷き、とん、とお膳の上にコップを置いた。

「先程私が入ってきた裏口のことですね。あの場所に、膨大な負の思念が溜まっていました。霊能者でなくても、敏感な人なら誰でもあの場所の異常に気づくでしょう」

「……ええ。俺が依頼したいのは、あそこに溜まっている負の思念について、です」

天宮さんが真剣な瞳で、俺を射抜くように、じつと見た。

さっき裏口から彼女を屋敷に入れたのは、人目につかないようにする為だけでなく、果たして彼女が、”裏口の異常”に気づくかどうかを試す為でもあった。裏口でさっき、彼女が一瞬後ろに振り返ったのは、異常を察知したからだ。もし彼女が気づかなかったのであれば、彼女は霊能者ではなく単なる詐欺師であるということになる。そうなれば、当然俺はこの依頼を取り止めにしただろう。

「あそこで　裏口で、以前誰かがお亡くなりになられたのですか？」

「ええ、そうです。……ここからの話、誰にも口外しないと約束できますか？」

「……勿論です。誰にも口外しないとお約束します」

「信じましょう。　昔、」

俺の父と母が、あそこで死にました。

その俺の言葉に、天宮さんが息を飲むのが解る。

「無粋なことをお聞きしますが……あなたの両親は、殺害されたの

ですか？」

「……ええ。だから、あんなに強い負の思念が依然としてあの場所に残っているんです」

人が非業の死を遂げたりすると、その時に味わった憎しみや悲しみなどの負の感情が、その場所に強く残ることがある。いわゆる残留思念、というものだ。この屋敷の裏口に残っているものは、まさにそれだ。

「……二人が死んだのは八年前、俺が九歳の時でした。ある日の夕方、俺は一人で屋敷の留守番をしていました。そんな時、裏口の戸を誰かが激しく叩きました。戸を開けてみると、両親が血みどろになって立っていて、二人はそのまま地面に倒れました。彼らはもう既に手遅れの状態で、すぐに息を引き取りました」

俺の話聞いた途端、彼女の表情が強張った。これが、御被いや供養などという、ただの依頼ではないことを悟ったのだろう。……大体、依頼の指定の時間からしてみても、あまりに突飛しすぎていたから、彼女ももう既にそんな予感はしていたと思うけれども。

「ならば、今回の依頼はあの場所で亡くなった二人の魂を供養する、ということではないのですか？」

「違います。俺が頼みたいのは……かなり専門的になりますが、あの場所に溜まっている残留思念をビジョンとして捉えて貰いたいです」

「つまり、それは……二人が息を引き取る際、目にした光景を見ろ、ということですか。……いや、違いますね。つまり、あなたは、私に、過去を見ると言っているんですね」

「お察しが早くて助かります。裏口に溜まっている残留思念をビジョンで捉えることによって、過去にあそこで何が起きたかを、明確に視て欲しいんです」

ビジョンで捉える、ということはその名の通り、映像でそれを視るということだ。

残留思念は、通常、霊能者によって様々な形に表現される。

耳に見知らぬ人の声が聞こえてくる、他人の感情が流れ込んでくる、過去の情景を見る……。

その形態は、極めて広範囲に渡る。

俺は、その中の一つである、『過去の情景を見る』という方法を彼女に依頼したい訳だ。

「……あなたは、霊的なものへの知識があるとお見受けしますが」

「はい。俺の生まれた家系がそういったものに深く関わっていて、俺はその影響を少なからず受けました」

「……なるほど。そうですか」

天宮さんが顎に手を当てて、少し考える仕草をした。

「できないことはないと思いますが……難しいかもしれませんが。何しろ、思念をビジョンとして捉えると、その映像はあやふやなものになりやすいから」

「……でしょうね」

俺は頷き、さらに問題を難しくするようですが……、と話を進めた。

「あなたが感じ取った思念を、俺の頭に直接送り込むことは可能ですか？」

俺のその質問に、彼女は眼を丸くした。

自分が感じ取った思念を他の人の頭に送り込む、ということは、例えるなら、自分の携帯で撮った動画を、他の人の携帯にメールで送るようなものだ。この場合、『携帯』が『人間の脳』にあたり、『動画』がその人が感じ取った『思念』にあたる。他人の携帯（他人の脳）に、動画（思念）を送信することによって、同じものを見せることができる、ということだ。

彼女が視た過去の情景をそのまま俺の脳に送り、俺もその過去の情景を見ることができるようになる。それが俺の依頼だった。

「不可能ではないけれど、そういったものへの耐性や経験がないと、危険を伴います」

「大丈夫です。自分で言うのも何ですが、俺は霊能力者のようなも

のですから」

「……確かに、そのようですね」

天宮さんは、俺の目を探るようにじっと見た。俺は目を逸らさず、その視線を受け止める。数秒見つめあった後、天宮さんが口を開いた。

「……わかりました。依頼を受けましょう」

「ありがとうございます」

「ただ、私が危険だと判断したら、すぐに中止します。よろしいですね？」

「ええ」

「実行は明日にしましょう。体調に気をつけるのは勿論のこと、できるだけ、甘いものや肉類などを口にするのは控えるように」

「わかりました。では、明日の夜、午前零時にまた来て下さい」

「承知しました」

天宮さんが、立ち上がった。

「ちょっと待って下さい。前金の支払いは……」

俺が言い終わる前に、彼女は手の平を差し向けて制した。

「いえ、結構です。支払いは、依頼が成功した後で構いません」

……それほど、この依頼を成功させるのは難しい、ということだろうか。

俺は軽く頷くと立ち上がり、再び天宮さんを裏口まで案内した。

「では、今日はこれで失礼させていただきます」

「……ええ」

天宮さんは丁寧にお辞儀をすると、颯爽と屋敷を後にした。

「……ふう」

俺は彼女の背中が見えなくなると同時に、大きく息を吐いた。

一気に緊張が抜けて、思わず戸口の壁に背中を付けて寄りかかる。

「……たいしたもんだ」

そう言っ苦笑い、俺は夜空を仰ぎながら、肩を竦めた。

天宮さんは、どんな難題を吹っ掛けられても、顔色一つ変えずに

了承してしまった。真つ当な霊能者なら、こんな依頼断るに決まっている。……それだけ、あの人は己の持つ力と知識に自信があるということだろう。ああいった人はなかなか見つからないと思う。探すのに苦労したかいがあったもんだ、と俺はほっと息をつく。

その場でしばらく俺は動かずに、夜空を見上げていた。星がよく見える。星の輝きは、どこか虚しげに見えた。

俺は後ろに振り向き、そつと裏口を見やった。

……ここで、俺の両親は死んだ。両親が死んだ時の記憶が、俺にはわずかしが残っていない。八年経てば、記憶が薄れてくるのは当たり前だが、だからといって、この記憶が思い出せなければ、犯人の手がかりを掴むことができない。

だから、俺は霊能者の力を借りて、あの時の記憶を蘇らせようとしている。あの時、何があったのかを知り、それを手がかりに犯人を追う。そして……犯人に、復讐するのだ。

しかし。

復讐への一歩が踏み出せそうなのに、俺は別に嬉しくなかった。何故なら。

犯人に対する憎しみがいつの間にか消え失せてしまっていた。復讐に必要なのは、憎しみの感情に他ならないのに、今の俺にはそれが無い。犯人の手がかりを掴めそうだとしても、そもそも犯人に対する憎しみがなくなってしまったのだから、特に何も感じない。

思えば、今まで復讐の準備がうまく進んでこなかったのも、復讐に必要な肝心の原動力が底を尽きてしまっていたからかもしれない。

俺がそうなった原因は、自分でもよく解っている。この八年間が、俺の憎しみをすべて癒してしまうほど楽しかったからだ。

目を閉じれば思い浮かぶのは、綾華や小父さん、小母さんと過ごした日々。そして、彼らの笑顔。

彼らが、復讐なんてしなくても幸福な人生を歩んでいけることを俺に教えてしまったのだ。

だが。

それでも、俺は止まらない。俺は元より復讐する為に生きてきた。この生き方が俺の心にあまりに染み付いて、止まれぬ所まで来てしまったのだ。

止まる方法が唯一あるとすれば、それは、この復讐を終わらせることだ。

すべてを終わらせた後に待つのは、平凡な日常。それは一見ありきたりだが幸福な宝物で、俺がこの世で唯一、欲して止まないものだった。

第一章 五

廊下に響くインターホンの音で、俺は目を覚ました。顔を上げて周りを見渡すと、客室だった。

どうやら、天宮さんが帰った後、客室で考え事をしているうちに、いつの間にか寝入ってしまったらしい。俺は起き上がり、大きく背伸びをした。そして、眠気を払おうと、ぱんぱんと頬を叩いた。

気合を入れた後に、客室を出て廊下を足早に歩く。玄関まで来ると、サンダルを足に突っ掛けて外に飛び出す。すると、門の前に立っていた綾華がこちらに振り向き、おはようと声を上げる。

俺は門へと走っていき、おはようと言葉を返した。未だ眠気が取れていないせいか、弱い弱い声音になってしまった。

「夜更かしでもしたの？」

綾華が俺の顔をじつと覗き込んでくる。

「……平気だ。気にするな」

俺はズボンのポケットから鍵を取り出して、門の錠を外した。

綾華が門扉を通りながら呟く。

「平気ってねえ。そんな眠そうな顔で学校に行けるの？しかも、まだ制服にさえ着替えていないじゃない」

綾華にそう言われて、改めて自分の格好を見ると、Ｔシャツに半ズボンという寝巻き姿のままだった。

「……やべ、着替えるのすっかり忘れてた。綾華、悪いが今日の朝飯はお前が作ってくれないか？」

綾華は一瞬顔を顰めたが、わかったわよと溜息交じりに頷いた。制服に着替えて、冷水で顔を洗い眠気を完全に吹っ飛ばした頃には、既に朝食の仕度は整っていた。

「悪いな、綾華。今日の夕飯は俺が作るから」

俺がそう言っただけで席につくと、向かい側の席に座っていた綾華が、心底呆れたような表情を浮かべた。

「何だよ。なんか俺、変なこと言ったか？」

「言ったわよ。……今日は、終業式でしょ。これが何を意味するか、解る？」

……何故だか解らないが、綾華は不機嫌そうだ。

「……今日で学校は終わり、明日から晴れて夏休み、ってことだろ？」

「違うわよ。終業式が終わった後、クラスの打ち上げがあるでしょー！だから、今日は夕飯なんて作る必要はないの」

「……ああ、そうだったな。俺は、どうせ行かないけどね」

「また、そんなことを言って！行きなさい、智也。たまには、人と触れ合いなさい！」

綾華に凄い剣幕で捲くし立てられ、俺は一瞬たじろぐが、すぐにやれやれと肩を竦めて大きく息を吐いた。

「いいよ、俺は。綾華が打ち上げに行くって言うんなら、俺は一人で外で食ってくるから」

俺はそう言ってお茶碗を綾華に差し出す。しかし、綾華はそれを受け取ってくれず、代わりに自分のお茶碗を手にとってご飯をよそった。

「打ち上げに行かないなら、ご飯抜きね」

「何だよ、その仕打ちは。……仕方ないなあ。わかったよ。誰か、友達誘って食いに行つて来るよ。それならいいだろ？」

綾華は、うーんと首を捻りながら、唸った。

「……そうねえ。智也の友達つて皆、優等生で寡黙な、まさに智也タイプの男子生徒しか居ないんだよね。もう少しジャンルを広げてもみなくちゃ……」

そう言つて、綾華はさらに考え込む。

綾華が一向にご飯をくれないので、俺はとりあえず手元にあった味噌汁を啜ることにする。

「そうねえ……坂山さんなんて誘つてみたらどうか？」

いきなり突拍子もない提案をされて、俺は味噌汁を危つく口から

零しそうになる。

「なんで、ろくに喋ったこともない相手と二人きりで、食事する必要があるんだよ」

俺は一瞬彼女と食事している場面を想像し、さぞかし腹の溜まらない食事になるだろうなと、苦笑いする。

「別に、二人だけでとは言ってないじゃない。他に友達を何人が引き連れていけば？」

「あいつらは、俺同様、親しい知人以外とは全く付き合おうとはしない奴らだ。誘っても、絶対来ない」

駄目だ駄目だと俺は左右に手を振る。

「あ、そうだ」

綾華が、突然ぼんと手を打った。

「智也、香我美さんを誘いなよ」

「……香我美か」

俺は一瞬の間、香我美との食事を想像する。

「それで良い。あいつの世間話は奥が深いから、結構為になるんだよな。あいつとなら、問題ない」

「……やけに乗り気ね。智也にしては、珍しい」

綾華は不思議そうな顔で俺を見つめながら、俺の茶碗をようやく受け取った。その時、

「なになに？何の話してるの？」

突然、背後から声がした。それが、久しぶりに聞く声だったので、俺は反射的に居間に入ってきた人物へと振り返る。

「小母さん、お早う」

俺に続いて、綾華もお早う、お母さんと声を上げる。

「お早う。智ちゃんとは一日ぶりになるわね」

小母さんが、軽快な声で言葉を返しながら、席につく。

……小母さんは、昔から俺のことを「智ちゃん」と呼ぶ。「智ちゃん」じゃ、まるで女だ。小さい頃はその呼び名でも別段気にすることとはなかったが、この歳になってもそう呼ばれるものだから、たま

ったものじゃない。外でその呼び名で呼ばれた日には、恥ずかしくて居たたまれなくなる。呼ばれるこっちの身にも、なって欲しいものだ。

そんなことを頭の隅で考えながら、俺は口を開く。

「……小母さん、疲れは取れたの？」

「うん、一晩ぐっすり寝たら取れたわ。今日は仕事がないから、のんびりしてられるわね」

小母さんの顔を見る。確かに顔に疲れの色はないようだ。俺はそれを確認して安心すると同時に、いつもの癖で、小母さんの顔と綾華の顔を見比べてしまう。やはり、親子だけあって、凄く似ていると思う。小母さんが髪型を今のショートヘアから綾華と同じストレートのロングヘアに変えたら、まさに二十年後の綾華の姿になるだろう。

小母さんは、コップに麦茶を満杯に注ぐと、一気にそれを飲み干した。思わず、小母さんの豪快な飲みっぷりに目を奪われる。

「で、何の話してたのよ」

空になったコップをとん、とテーブルに置いて、小母さんが言った。

「智也が、打ち上げ行かないんだって。人付き合いも大事なのに」綾華は昔から、俺の社交性のなさを気にしていて、それを言及してくる癖がある。

「良いじゃないの。人それぞれなんだから。智ちゃんは、今の智ちゃんのままで十分良いわよ」

綾華が否定的なのに対して、小母さんは、個性があつてよろし、と俺の性分を受け入れてくれる。俺の話題になると、大体二人は正反対の意見を主張して、言い合いを始める。

「良くないわよ。普段口数が少ないから皆には知られていないけど、智也のする話って、案外面白いのよ。それを披露する機会を増やしてあげるべきでしょうに」

「智ちゃんは、口数こそ少ないけど、自分の主張は、はっきりと言

う子よ。心配することないわ。……ねえ、智ちゃん」

小母さんは食パンを齧りながら、綾華を鼻で笑うかのようにそう言った。俺は特に返す言葉が見つからず、黙々と食事を続ける。

「どこまで樂觀的なんだか。とにかく、それだけの度胸があるんなら尚更社交的になるべきじゃないの？」

俺は食卓で永遠と議論し続けるであろう二人を残して、ごちそうさまと席を立つと、さっさと食器を洗い始めた。

綾華は今日も相変わらず朝練があつて、早めに登校しなければならず、議論なんてしてる場合じゃないことに気づくと大急ぎで家を飛び出していった。俺はというと、小母さんとの会話をのんびり楽しんでから、家を出た。

「智ちゃん。今夜、お母さんとお父さんは、久しぶりに二人だけで外食してくるから」

門の前で小母さんが、嬉しそうに笑いながら言った。小母さんはいつもより上機嫌だ。娘と久しぶりに話を沢山することができて、嬉しかったのだろう。その顔は、とても三十七歳とは思えないような若々しい笑顔だった。

「解った。俺は友達と外で食ってくるから」

「……そう。あんまり夜遅くならないようにね」

「うん」

俺が頷くと、小母さんは顔を近づけて小声で囁いた。

「さっきの話題のことなんだけどね、綾華は別に悪気があつて、あんなこと言ってるわけじゃないのよ。智ちゃんにも、楽しく過ごしてもらいたいっていう、綾華なりの気遣いの」

「わかってるよ、小母さん。俺は別に気を悪くなんてしてないよ。

……綾華は世話好きな優しい奴だ。昔からこれっぽっちも変わってない」

それに、と俺は言葉を続ける。

「……俺はこう見えても、もう十分楽しく過ごしてる。無理してま

で、これ以上を望もうとは思ってないさ」

「……そう。さすが智ちゃん、綾華のこと、よく理解してくれてる。お母さん、嬉しいわ」

そう言って、小母さんはぽんぽんと俺の背中を叩いて笑った。

「……そろそろ行くよ」

腕時計を見ると、既に七時四十五分を回っていた。

「行つてらっしゃい、智也」

と小母さんは微笑みながら、手を振った。

そう言つた小母さんの瞳には微かな期待が籠められていて、俺は一瞬、どう答えれば良いのかと戸惑う。

今、小母さんは俺のことを「智ちゃん」ではなく、「智也」と呼んだ。

……俺にとって、小母さんは、例え血が繋がらなくとも、母親に違いなかった。そして、小母さんも、俺の母親になることを望んでいる。

ならば、俺が返すべき言葉は、一つしかないはずだ。だが　その言葉を言うことは、俺にはできない。

俺は断腸の思いで、迷いを振り払い、口を開く。

「……行つてきます、小母さん」

俺のその返答に、小母さんは一瞬、残念そうに、そして寂しそうに、顔を歪めた。

「……小母さん、か」

そんな小さな呟きが聞こえた。

だが、俺は気づかないふりをして、小母さんに背を向けた。

言つてやりたかった。……お母さん、と。

だが、俺にはそれがどうしてもできなかった。

「……車に気をつけてね」

背中に掛かる小母さんの声はどこか寂しげだった。小母さんの声に答えられない自分が腹立たしくて、何より小母さんに申し訳なくて、俺の心は針を刺すようにちくちくと痛んだ。

第一章 六

学校に着くと、俺はすぐに体育館に向かった。終業式が始まると、寝不足だった所為か、うとうととまどろみ始め、仕舞いにはすっかり寝入ってしまった。目を覚ます頃には、式は終わっていた。周りを見ると、生徒達がそろそろと列を成して体育館を出て行くところで、俺は慌ててその中に加わった。

教室に戻りホームルームを済ませると、放課となった。生徒達は夏休みの予定を口々に話しながら教室を出て行き、馴染みの教室にしばしの別れを告げるのだった。

今日の午後の予定は、やはり図書室で読書になるだろう。そこでふと、今朝、綾華に言われたことを思い出す。

…… そうだ。香我美を誘うんだっけ。

今、直接香我美のクラスを訪ねて誘えば良いんだろうが、それはちょっと気が引けた。香我美と会話するのは、いつも図書室で会う時だけで、他の場所では顔を見かけても挨拶すらしないのだ。会話は何度も交わしたことがあるのだが、どういう訳か、俺たちには図書室以外では喋らないという、奇妙な習慣があった。

…… 図書室であいつが顔を出すのを待ってれば良いかもしれない。だけど、もし現れなかったら…… まあ、その時はとっと諦めて、他の奴を誘えば良いか。

考えが纏まった所で、一先ず腹ごしらえをしようと席を立つ。今日は終業式なので、購買部と学食は休みだ。だから、昼食は一度学校の外に出てから、近くのコンビニで買うことになる。

俺がコンビニに買い物に行くため、教室を出ようとしたとき、廊下で立ち話をしていた数人の生徒達から声が掛かった。

「ねえ、今日クラスの打ち上げあるんだけどさ。加賀君も、良かったら来ない？」

「ほら、駅前に新しく焼肉屋がきただろ？あそこでやろうかと思

ってるんだ」

彼らが楽しそうに喋るのに釣られて、思わず口を開きかけた。だが、寸前の所で口を噤み、言葉を押し留めた。

「……実は、今夜は用事があつて、ちよつと行けないんだ」

苦笑いをしながら、ごめん、と謝る。

「あ、そうなんだ。それは残念」

「じゃあないな。今度やる時は来いよ」

生徒達は俺に興味を失つたようで、すぐに去っていった。俺は遠ざかっていく生徒達の背中を、しばらく立ち尽くしたままじつと見つめていた。だが、ふと我に返ると、軽く息を吐き、昇降口へと向かった。

昼食を済ませ、図書室で漫然と窓の外を見ていると、不意に眠気が差してきて、だんだんと意識がまどろみの中へ沈んでいった。

昨日、明け方まで依頼のことで忙しかった所為だろう。身体に溜まった疲労は大きかった。俺が目覚める頃には、既に時刻は四時過ぎだった。

俺は背伸びをすると、図書室をぐるりと見渡した。この時間になつても、生徒の姿はちらほら見える。大方、夏休み中に読む本でも探しているのだろう。

と、奥の書棚から三人の女子生徒がこちらに近づいてきた。三人とも、知らない顔だ。同じ学年だろうか。

「加賀君」

真ん中に立っていた女子生徒が、にやにや笑いながらそう言った。他の二人も、何故だかわからないが、くすくすと可笑しそうに笑っている。

「何？」

俺は、なるべく不快の色が顔に出ないようにしながら、答えた。

「あのさ、香我美さんのことなんだけど」

「……香我美がどうした？」

何で香我美の話が出るんだろう、と訝しげに思いながら聞くと、

「香我美さんと加賀君って、付き合ってるの？」

と興味津々といった様子で身を乗り出して聞いてきた。他の二人も、俺へ視線を集中させる。

「……付き合ってないよ。それが、どうかした？」

俺はそう答えて、一層訝しげな視線を彼女達に送る。

「いつもここで二人が仲良く話してるところを見かけるから、てっきりそうかと思って」

女子生徒の言葉に、うんうんと他の二人も頷く。

「それに香我美さん、今日の終業式の時だって、ずっと加賀君のこ
と見てたんだよ。合同授業の時だって……」

「きつと香我美さん、加賀君のこと好きなんだよ」

女子生徒達は口々に勝手なことを言っては、楽しそうにはしゃいでいる。俺は呆れたように肩を竦めると、彼女達へ言ってやった。

「俺も人の事は言えないが、あいつはそういった事に物凄く疎いぞ。
おそらく、それはない」

俺がきっぱりとそう言い切ると、女子生徒たちは不満げな表情を浮かべ、反論しようと口を開きかけた。だが、調度その時、図書室の入り口から、本人が入ってきたので、女子生徒達は渋々引き下がった。

「……じゃあね、加賀君」

「バイバイ」

「香我美さんを宜しくね」

女子生徒達は俺をからかう様にそう言つと、くすくすと笑いながら図書室を出て行った。

入れ替わるように、香我美が俺の元にやって来る。

「何、あの子達」

香我美は後ろに振り返って、去っていく三人の背中を視線で追っている。

「俺にもわからない。名前すら名乗らなかったから」

「すれ違う時、頑張ってたねって訳もなく囁かれたんだけど……どうい

う意味かしら」

「あいつら、お前が俺のことを好きだって思ってるみたいだぞ」

俺の言葉を聞くと、香我美は目を白黒させた。

「何よ、それ。どこからそんな発想が出てくる訳？」

「知らないよ、そんなの。香我美はそういうことに関しては物凄い疎い奴だから、絶対にそれはないって一応弁解しといてやったぞ」

「そうやって簡単に否定されるのも、何だかム力つくわね」

香我美はそう言って苦笑いを浮かべた。

「とりあえず、座れよ」

俺は正面の席を指差す。すると、香我美は意外そうに俺を見た。

「……どうした？」

「いや、あなたがそんなことを言い出すなんてって思ったの。いつも立ち話しかしたことなかったから、ちよつと驚いた……」

香我美は俺の顔を不思議そうに見ながら、椅子に座った。

俺はこほんと咳払いを一つして、香我美を見据えた。

「香我美」

「何よ。そんな真剣な表情で」

香我美は少しうろたえながら、俺に問いかける。

俺は、単刀直入に本題に入った。

「今夜、一緒に飯食いに行こう」

俺のその言葉に、香我美はは？と咂然と口を開けて驚いている。

「……本当に今日はどうしたの？寝惚けてるんじゃないの？」

「寝惚けてなんかない。そんなに俺の言ってる事は変か？」

「変よ。あなたからそんな誘いをされるなんて考えもつかなかった」

気のせいかな、香我美の顔が微かに上気しているように見える。俺はどうして、そんなにうろたえる必要があるのか、理解しかねた。

「私は、別に良いけど……でも」

香我美の焦点の定まらない瞳が、大きな動揺を示している。俺は首を傾げながら、

「何だよ、ただ飯食いに行くだけだろう？お前となら話の馬が合う

かと思つて誘つてみたんだけど」

俺がそう言つと、香我美は一瞬無言で俺の顔を凝視した。そして、額を手で押さえて、はあと大きな溜息を吐くと、呆れた様子で言った。

「……何よ、びっくりするじゃない。始めから、そうとはつきり言いなさいよ」

「俺は飯食いに行こうと言っただけだぞ」

「例え、あなたがそう思つていたとしてもね、食事の誘いなんてされたら、世の女性は皆、そういう意味だと勘違いするわよ。まあ、付き合いが長かったり、時と場合によつては、それだけで通るかもしれないけど。……でも、そうじゃない場合は、最初から誤解のないように、はっきり言つて欲しいわ。驚いて損した」

「意味の解らない奴だな。何をそんなに慌てたり、怒ったり……。香我美こそ今日はおかしいんじゃないか？」

俺がそう言つと、香我美は突然身体の動きを止めた。

「……そうかもしれない。何考えてるんだろう、私。こんなこと考えに来てる訳じゃないのに」

「香我美？」

香我美は床の一点にぼんやりと焦点を当て、何か考えているようだった。

「どうした？本当におかしいぞ、お前」

「……そうね。この頃、色々思うことがあつて、疲れてるのかもしれないわ」

香我美は抑揚のない声で呟いた。香我美のそんな覇気のない様子に、俺は肩を竦めて、言った。

「旨い飯食えば、沈んだ気分も消飛ぶだろうよ」

「……うん、あなたの言う通りかもね。じゃあ、せつかくだから、付き合つわ」

香我美はそう言つて、僅かに微笑んだ。

香我美と一緒に学校を出た。とりあえず、どこに行こうかと話し合う。打ち上げが沢山行われる今日のような日に駅前に行けば、知り合いに沢山会いそうなので、葉月川を越えてすぐにある商店街へ行くことに決まった。

商店街に向かう途中、俺も香我美も沈黙が苦でない性質な為に、お互いに無理に会話をしようとはしなかった。ただ、時々交わされる会話は、普段よりどこか楽しげで、穏やかなものだった。

橋を渡って商店街が見えてくる頃には日はすっかり沈み、道上に並ぶ街灯は爛々と輝いていた。

俺は『美都瀬商店街』と大きく描かれた門の前まで来ると、口を開いた。

「……誘つという何なんだが、ここら辺で旨い店って知ってるか？」

香我美は首を横に振り、

「知らない。外食なんてほとんどしないから」

と淡泊な声で答えた。

「……外で食うときはいつも駅前に行ってたから、ここら辺は俺も良く知らないんだ」

香我美の返事はなかった。隣を見てみると、香我美は商店街に立ち並ぶ店を物珍しげに眺めている。俺も香我美の視線を追って、店の列に注目した。若者受けしそうな派手な店が通りの左右を占めていた。

「興味があるのか？」

「……まあね。あんまりこういう店があるところには来ないから」

「インドアなタイプなのか、香我美は」

「そうでもないと思うけど。良く旅行に行ったりするし」

「じゃあ、香我美は……遊園地とか映画館とかにあんまり行った事ないんじゃないか？」

「正解。私、自分でも呆れるほど、流行に疎いのよ」

「友達に、渋いって言われるだろ。俺もよく言われた」

「それも、正解。仲間が居て、嬉しいわ」

俺と香我美はしばらく無言で色取り取りの光で飾られた商店街を見て回った。商店街は平日なのに人通りが多い。通り過ぎる通行人は、やはり若者が多かった。もうすぐ夏休み、もしくはもう既に夏休みに入っている学生達だろう。

「結局、どこにするの？」

香我美がこちらに振り向いて、言った。

「……ラーメン屋、定食屋、中華料理店。結構種類あるんだな」

時間が経つにつれ、商店街はますます賑わいを見せるようになった。立ち止まる俺達の横をぞろぞろと沢山の人々が通っていく。

「あそこはどう？ 私さ、生まれてこの方、数回しか入ったことないのよね」

香我美の指差す先には、ファーストフード店があった。

「俺もあまり入らないよ。普通の人なら、ここまで来てファーストフード店かよ、って思うんだろうけど、俺達の場合は少々特別だからな。良いよ、あそこにしよう」

俺達は人込みに流されるように歩きながら、なんとか店の前まで来ると、少々戸惑いながらもその中にそっと足を踏み入れたのだった。

俺達は二階の窓際の席に座り、夜の商店街の景色を眺めている。

「人が多いのね。駅前ほどじゃないけど」

「こんなに多いんじゃない、うちの学校の連中も来てるかもな。……ほら、あの集団なんか、同じ学年の奴らだ」

俺は中華料理店の前で屯している若い連中を指差す。

「よく知ってるじゃない。あの中に、顔見知りが居るの？」

「……よく見てみるよ。すぐに解るさ」

そう言って、俺が手で促すジェスチャーをすると、香我美は目を細めながら、通りに屯する集団をまじまじと見た。

「……図書室に居た三人組じゃないの。なんでこんなところに居るのよ」

「駅前の方が学校から断然近いから、商店街は意外に穴場なんじゃないかと思ったんだが……どうやらそうでもないらしいな」

「こうして二人で一緒に居るところ見られたら、どうなる？」

「十中八九、学校で噂される」

「……でしょうね。まあ、私はそんなこと端から気にしてないから別に良いけどね」

ポテトを摘みながら、香我美は平然とそう言った。

「そう言えば、香我美ってどこに住んでるんだ？」

「学校の近くのマンションで一人暮らしよ」

「そっか。……奇遇だな。俺も一人暮らしだ」

お互いに淡々と食事を進めながら、時折会話を交わす。ただ、視線は外の景色へと注がれていた。

眼下で、沢山の人が通りを往来している。こうして上から眺めていると、通行人一人一人の表情や仕草によって、色々な人間像が見えてきて、成る程面白いなあと思う。そうして商店街の景色に見入っていると、ふと横を見れば、いつの間にか、香我美が俺の顔をじつと見つめていた。

「……あのさ、加賀君」

その声には真剣さが込められていた。俺は黙って香我美の方に身体ごと向き直ると、正面に彼女を見据えた。

「加賀君の両親って、何の仕事してるの？」

聞いている内容はありきたりだが、その声音は異常なまでに真剣な色を帯びている。その真剣さが何を意味するのかわからない。しかし、ありのままの事実を述べることで俺はそれに精一杯答えようと思った。

「俺の両親はもう他界してるんだ」

香我美の口から、驚きの声が漏れる。

「……そうなんだ。ごめんね、そうとは知らずに聞いちゃって……」

香我美は抑揚のない声で謝った。そして、俯いて、焦点の定まらない目を地面へと向けた。

「香我美……？」

……何故、そんな驚愕の表情を浮かべているのか。

「どうした……？」

と俺が香我美の肩に手を置いてその顔を覗きこむと、香我美はぼそりと呟いた。

「私もね、親を亡くしてるのよ」

香我美の目には、薄っすらと涙が滲んでいた。

「ごめん……」

香我美はそう言っただけ俺の手を肩から解くと、目を閉じて肩を大きく上下させて、ゆっくりと深呼吸をした。しばらくの間、香我美は目を閉じたまま、何かを考えているように黙っていた。そして、目を開いて顔を上げると、ゆっくりと俺を見据えた。香我美は落ち着いた表情を取り戻していた。

「大丈夫か、お前」

「大丈夫よ……。両親について考えたら、少し悲しいこと思い出しちゃってね」

今まで一度も見たことのない香我美の表情に、戸惑いを覚える。

「……俺もだよ、香我美。両親についてはひどい思い出しか残っていないんだ」

俺は、自嘲気味にそう言って目を伏せる。

「……あなたも、そうなのね」

「幼い頃両親を失った人は、大体つらい思い出を抱えてるよ。俺の場合は、悪夢としてそれが現れることがある。……今となってはもう、それにも慣れたけどな」

俺は遠い目で窓の外を見た。

「両親を失って、悲しかった？」

「……悲しかったさ」

両親が死んだ時の悲しみが再び胸に蘇り、俺は顔を手で覆って嘆

息した。

「失ってから大切なものに気づくのは、云わば人間の理なのかもしれないな。何もかもが終わってから、初めて人間は気がつくものなんだよ」

俺の口から、訳もなくそんな言葉が零れ出た。

「あなたは、彼らを愛してなかったの？」

「……愛してたさ。ただ、それに気づいたのが、彼らが死んだ後だったってことだよ。幼い頃の俺にとって、両親はそれはもう、憎らしくて恐ろしい存在だったさ。日々、俺は怯えて生きていたよ。事実、俺の両親は、とてもじゃないが、真つ当な人間とは言い難かった」

香我美は、じつと真剣な表情で俺の話に耳を傾けている。

「幼い俺から見ても、彼らが異常であることは明らかだったよ。そんな異常な両親に酷い目に合わされる度、俺は彼らを哀れに思うことで、現実から必死に逃れようとした。そう考えなければ、とてもじゃないが、俺は生きていけなかった」

「虐待……を、受けてたの？」

と香我美が、恐る恐る口を開く。

「そうだ、あれは虐待としか言いようがない。……だけどな、困ったことに、当の本人達は、虐待をしてることにさえ気づいてないんだから。困ったものさ、全く」

「それは、どういうこと？」

香我美の声が、震えている。普通、常人がこんな話を聞いて、良い想像なんてできはしない。香我美の震えが、悪夢のような現実への怯えであることは見て取れた。

俺は額に手を当てて、喋りすぎたかと呟いた。

「俺の両親の話なんか聞いても、何の為に成らないぞ。無理に、悩みの種を増やす必要はない」

「私は平気よ。……続けて」

「俺には全然平気そうに見えないんだけどな。……お前は、俺のこ

とを自分と重ねているんじゃないか？」

俺の言葉に、香我美は大きく目を見開いた。

「そんなことは……！」

反論しようとする香我美の肩を、押さえる。

「例えそうでなくとも、俺はお前にこんな話をしたくない。俺の両親の話はここまでにしよう。悪いな、中途半端に話を切るように。ついつい流れに任せて喋りすぎた」

俺は香我美から視線を外し、それきり喋らなくなった。すると、突然、香我美が「聞かせて」と小さな震えた声で言った。

「……聞かせて。私は、どんなに残酷な現実でも、ありのままを知りたいの。だから、聞かせて」

香我美は身体を震わせながら、俺の腕を強く握った。握られた腕がきしきしと痛む。

「香我美……」

香我美の手からは、震えが伝わってくる。俺は、大きく溜息を吐いた。

「わかったよ。気分が悪くなって飯を食べなくなっても、俺は知らないからな」

俺がそう言うと、香我美は微笑みを見せて、うん、と頷いた。

俺は両親がどんな人間だったのか、また、その両親から受けたことや、当時の俺の心境を、詳しい内情は話すことができないから、掻い摘んで説明した。香我美はそれでも十分理解したようだった。ただ、話していくうちに、彼女の顔は怒りに歪んでいった。

「両親が死んだのは突然のことだったよ。俺が小学校二年生の時だ。二人は、俺の目の前で息を引き取った」

香我美は拳を強く握りながら、俺の話を険しい顔で聞いている。「憎い存在が居なくなっただから、俺は嬉しいはずだ。嬉しいはずなのに……何故か、俺は泣いていたんだ。悲しかった。心にぽっかりと空洞ができて、それが悲しかった。大切なものを失ってしまったんだと、そこで初めて気づいたんだ」

「どうして？そんな狂った人間達のことを、本当に大切だったの？」

「……ああ」

俺は静かに頷いた。

「嘘よ！二人は、散々あなたを苦しめてきたんじゃない！」

香我美は怒りで肩を震わせながら、大きな声で怒鳴った。周囲の視線が、俺達に集まる。

俺達はお互いをじっと見つめながら、口を閉じた。しばらく経つと、周囲は何事もなかったように俺達から視線を外した。

「どうしてそう思うのかは、自分でもわからない。俺は、もしかしたら狂っているのかもしれない……血は争えないからな。……だけどな、どんなに憎かろうが恐ろしかろうが、俺にとっては彼らも大切な存在だったんだ。唯一の肉親だったから」

「私は、あなたが理解できないわ」

そう言つて香我美は俯いた。

「香我美の両親は、普通の、優しい人間だったんだな」

「そうよ。優しかった……大好きだった」

「じゃあ、亡くなった時は、凄く悲しかっただろ」

「うん。悲しくて悲しくて……」

何かに逃げずに居られなかった、と香我美は言った。

「俺も一緒だ。悲しくて、その感情を何かに注ぎ込まなければ耐え切れなかった」

悲しみを憎しみに変え、復讐を誓うことで、俺はなんとか耐えようとした。

そりゃあ、復讐を誓う、なんて行為は、決して正しいはずがないだろう。だけど、あの時、それに逃げなければ、俺の心は立ち直れないほどに壊れてしまったかもしれないのも事実だ。

「私は今になって、あの時の選択が間違っていたことにやっと気づいた。だって、父さんと母さんはきつと、私に幸福に生きて欲しいって願ったに違いないもの。その願いを棒に振って、私は今まで何をしてきたんだろ……」

「例え今更でも、気づけた香我美は凄いと思うよ。俺の場合は、気づくのが遅すぎて、もう戻れないところまで来ちゃったから。気づけた香我美が正直羨ましいな」

「……遅くなんてないわよ。望めば、人は変わることができると私は思う」

「だろうな。だけど、人は変わるにはたぶん、勇気と忍耐が必要なんだよ。俺には、酷い仕打ちに耐える忍耐があっても 変わるための勇気がないんだ」

俺はそう言っていると、我知らず自嘲に似た笑いを浮かべた。香我美は目を伏せ、そう、と少し寂しそうに呟いた。

沈黙が、俺達の間流れる。少し興奮しながら話した為か、疲れを感じ、俺は椅子にもたれ掛った。

すると、香我美が沈黙を破った。

「……なんだか、スツキリした」

と 香我美は息を吐いて、俺と同じように椅子に寄りかかり、宙を見上げた。

「お前が覇気がなさそうにしてた原因は、これだったんだな」

「うん。加賀君と話したら、随分楽になったわ」

香我美が大きく背伸びをして、俺に微笑んだ。

「俺も香我美と話せて良かったよ。こんなこと、綾華以外に話したのは初めてだと思う」

「話し相手になってくれて、ありがとう」

香我美はそう言って、嬉しそうに微笑んだ。その表情が、今まで見たことのないような明るい笑顔だったので、俺は思わず香我美の顔に目が釘付けになった。

「それと、加賀君が、見かけに寄らず優しい人なんだって解って良かったわ。また機会があれば、一緒にご飯食べましょ」

「あ……ああ」

俺はろくな返答もできずに、香我美の顔に見入っていた。それに気づいた香我美が、どうしたのと俺を見返したので、慌てて俺は視

線を逸らしたのだった。

それから、すっかり冷めきったハンバーガーをお互いに苦笑しながら食べて、俺達は店を後にした。

腕時計を見てみると、七時ジャストだった。

「香我美は、どこか寄り道してくのか？」

「ううん。私は、もう帰るわ。人が多いところは苦手でね、ちょっと疲れちゃった」

「そうか。なら、俺ももう帰ろうかな」

俺達は、なんとなく清々しい気持で元来た道を引き返し始めた。すると、調度その時、携帯電話が鳴った。

携帯を開きメールを見てみると、知らないアドレスが表示された。

「誰からだ……」

メールを開きその内容を見て、俺は眉をひそめた。

「……何してんだ、あいつ」

「どうしたの？」

「綾華が、打ち上げの会場にまだ来てないらしい」

「連絡してみたら？」

「……ああ。そうする」

だが、綾華の携帯に電話をかけてみても繋がらず、俺は舌打ちをした。

「確か、綾華さんは同じクラスの坂山さんと仲良かったはずよ。一緒に居ることは考えられない？」

「そうだな。連絡してみるか」

俺はそう言っ、携帯のアドレス帳を開く。

「って、坂山さんに連絡つくの？」

香我美が目丸くしながら、聞いた。

「……それが、つくんだよ。何故だか知らないが、アドレス帳に彼女のアドレスが登録されてる。大方、綾華が何か企んで、俺に気づかれないように勝手に登録したんだと思うけど」

俺は急いで坂山さんのアドレスにメールを送った。すると、すぐに電話が掛かってきた。知らない番号だ。

「もしもし……？」

俺が反射的に電話を取ると、

「助けて、加賀君……！」

と、甲高い悲鳴が電話の向こうから聞こえてきた。

「坂山さんか……？」

「綾華ちゃんが、絡まれて……！」

その言葉を聞いた瞬間、どくと心臓が大きく跳ね上がった。

「綾華が絡まれてる？……おい、今どこに居る！？」

俺は思わず大声で聞き返した。

「美都瀬商店街の、Bマートの前……！」

「今行く……！」

電話は切らずに、そのまま受話器を耳に押し当てながら、俺はBマート目指して走り出した。

「ちよつと、加賀君！どこに行くの！？」

後ろから香我美の呼ぶ声がするが、そんなことは後回しだ。今は、早く、綾華の元へ……！

人込みを押し退け、一刻も早く綾華の元へ辿り着こうと躍起になって走った。身体は火達磨になったかのように熱い。

頭の中はぐちゃぐちゃになり、上手く思考を繋ぎとめることができない。

冷静になるのも忘れ、俺はただ一心にアスファルトの上を走り続ける。

途中何度も通行人にぶつかるが、俺は構わずに走り続ける。一刻も早く綾華の元へ行くには、目の前の走り回る子供が、立ち止まる老人が、手を繋ぐ男女が？ 邪魔だ。俺はそれらの障害を躊躇なく突き飛ばし、綾華の元へと向かう。

胸に、以前大切なものを失くした時の、あの喪失感が再び蘇る。あんな想いをするのは、嫌だ。今度こそ俺は守り通す。前のよう

に、失うのは絶対に嫌だ。

通りを右に折れると、Bマートが前方遠くに見えた。俺は半ば足をもつれさせながら、走る。膝ががくがくと震えて躓きそうになる。悲鳴を上げる身体を、精神の綱で無理やり引っ張っていく。

Bマートの前まで来ると、俺は倒れるように地面に膝をついた。息を切らせながら、周りを見渡す。先程の大通りとは違い、この狭い通りは通行人がまばらで、ひっそりと静まり返っている。遠くの方で、大通りの賑やかな音が聞こえてくる。

Bマートの前には誰も居ない。ガラス越しに店内を覗くが、客は一人だけで、それも見知らぬ中年の男だ。

助けを求めた坂山さんの姿はなく、綾華の姿も、怪しい人間の姿もない。

そこで、Bマートの横の路地裏に目が留まる。俺はゆっくりと立ち上がると、その路地裏へと近づいていく。緊張が身体を縛る。俺は思わず息を止めて路地裏の奥へと目を凝らす。

路地裏は暗かった。ビルに挟まれた狭い空間に、数人の影が立っている。一番手前の小さな影は、見覚えがある。坂山さんだ。顔を蒼白にして、路地裏の奥を見つめている。恐怖からか、身体が震えている。坂山さんの横に立つ二つの長い影、さらにその奥に立つ四つの長い影は、全く見覚えがない。しかし。

しかし、路地裏の一番奥、ちょうど行き止まりに当たる部分。そこに一つ、見覚えのある影が蹲っている。

その影に、じつと焦点を当てる。

身に纏ったワイシャツは無残にも裂け、ほぼ半裸の姿の少女が蹲っている。

長い髪はくしゃくしゃに乱れ、少女は焦点の合わない目で地面を見つめている。

「あやか？」

彼女の変わり果てたその姿を見た瞬間。ぐしゃり、と俺の中の大事な何かが砕け散った。

「何だ、お前」

低い男の声がし、坂山さんの隣の一つの影がこちらに振り向いた。続いて、一斉に五つの影がこちらに振り向く。

「てめえ、何見てんだよ」

「おい。聞いてんのか？」

口々に罵言を吐きながら、影が近づいてくる。近づくにつれ、通りから差し込む光で、男達の姿が浮かび上がる。だが、俺の目は彼らを一瞬捉えただけで、すぐに綾華に釘付けになった。

綾華。

俺の喉から、掠れた声が出る。

「てめえ」

襟元を掴まれ、力任せに引き寄せられる。

「お前、あいつの知り合いか？」

男は凄んだ声で、俺を威圧しようとする。

「なんとか言いやがれ！」

黙れ。

「……今何だった、お前」

男の言葉と共に、首筋がきつく締め付けられる。

「黙れ、と言った」

俺は、襟元を掴んだ男の腕を握り、静かに言った。男の腕から軋りと奇妙な音がして、男の口から短い悲鳴が漏れる。俺は男の腕を握り締めながら、首から引き剥がす。

「黙れと言ったんだ。解らないか？　そうか。なら、俺が教えてやるよ」

「腕を　離せ！」

暴れだす男の腕をさらにきつく握り締めながら、俺は男の目を見つめた。

男の瞳の奥で、微弱な炎がゆらゆらと揺らいでいる。その炎はどす黒い色をしており、男の精神状態を良く物語っている。

快活で素直な性格の持ち主なら、瞳の炎は明るく澄んだ色をして

いる。

対して、物事に否定的で、不平が絶える事のない者が持つ炎は、
どんよりと黒ずんでいる。

男の炎は、禍々しいほど黒ずんでいた。俺は、その黒ずんだ炎に
『油』を注ぐ。

どくどくと小気味良い音を立てて、それは注がれる。すると、男
の炎は瞬時に大きく燃え上がった。

これで、準備は完了。後は、この炎に『意思』を投げ入れる
だけで良い。

「命令する。 黙れ」

俺がそう呟くと、悲鳴を上げていた男が急にしんと静かになった。
「ほら。お前らも、黙れ」

俺は、他の五人の目を見つめ、同じように命令した。すると、五
人の口から言葉が吐き出されることはなくなった。

「 どうだ。 黙る、ということがどんなことか、ようやく理解で
きたか？」

俺は、くくく、とぐぐもった笑い声を上げる。

これこそ、加賀家に伝わる呪術の一つ、『蛇眼』。相手の目を睨
むことで、強制的に命令に従わせることができる。『蛇眼』で睨ま
れた者は皆、術者の傀儡となり、どんな命令でも従うようになる。
「なんだ。 黙ったと思ったら、今度は暴れだしたか。仕方がないな
」

俺は、掴みかかってきた男達に、さらなる命令を下すのだった。

第一章 七

六人の男達は皆、地面に倒れて気絶していた。その横で、坂山さんが怯えたように縮こまっている。

俺は彼女の横を通り過ぎて、ゆっくりと路地裏の奥へと歩いていく。

「綾華」

蹲っている綾華の前で屈み、彼女の顔を覗きこんだ。

「……智也」

綾華が顔を上げる。泣きそうな顔をしていた。

「怪我はないか？」

「ないよ。だけど、服がびりびりに破かれちゃった」

涙声でそう言って、綾華が自分の服を見下ろす。

「大丈夫だ。俺がすぐに着替えを買ってきてやる」

「うん。そうして……」

綾華は力なく頷いた。俺は綾華の生気の籠っていないその目を見ると、胸が締め付けられた。

「綾華、俺を見る」

綾華は言われるままに、俺を見た。

「元氣を出せ」

綾華の目をじっと見ながら、そう言う。蛇眼は使っていない。だが、蛇眼よりも、もっと力がある言葉だと信じたい。

綾華はじっと俺の目を見つめた後に、頷いた。表情が少しだけ明るくなった気がする。

俺はそれを確認すると、手を引いて綾華を立ち上がらせた。

「早くここから離れよう」

俺は制服の上着を脱ぎ、綾華の背中にそれを掛けながら、言った。綾華がその言葉に頷く。

それから俺は、縮こまっている坂山さんの元へ行き、彼女の腕を

取って立ち上がらせた。

「大丈夫か？」

幸い、彼女には怪我はないようだ。坂山さんは俺の言葉にゆっくりと頷く。

俺達は、路地裏から出ると、狭い通りをしばらくの間走った。商店街の外れまで来ると、やっと足を止めた。

人気のない通りにある、既に店閉まいをしたパン屋の駐車場で、俺達はしばらく息を切らせて無言で立っていた。

だが突然、

「ごめんなさい！」

坂山さんがそう叫び、頭を下げた。

「こんなことになったのは、全部私の所為なの」

頭を下げたまま、ごめんなさい、ともう一度叫ぶ。

「……どういことだ」

俺は、坂山さんに視線を向けて、無機質な声でそう言う。

「さっきの不良の一人は、前から綾華ちゃんに気があったの。あいっは私が綾華ちゃんと仲良いことを知っていた。だから私に、会わせろ、と迫ってきたの。私、断れなくて 何も言わずに、綾華ちゃんをあそこに連れていったの。そしたら まさか、こんなことになるなんて」

そう言って坂山さんは、顔を手で覆った。

俺は静かに息を吐いて、顔を覆った彼女の両手を取った。

「それは、本当なのか」

坂山さんは俺に両手を取られ、泣き顔を晒しながら頷いた。

「そうか」

俺はぽつりと呟く。そして。

「ふざけるな」

と、彼女の両腕を強く握り締めた。

「ごめんなさいで、許されると思っているのか！」

俺が声を張り上げると、彼女は悲鳴を上げて後ろへ退き、近くに

停めてあつた車へと背中を勢良く打ち付けた。

「もし、綾華に何かあつたら　俺は、お前を　！」

「やめて！」

綾華の叫びに、俺は声を止め、思わず彼女の腕を離す。

「やめて、智也。坂山さんは、悪くないの」

「どうして、悪くないと言えるんだ？」

俺は依然、目の前の女を睨みつけながら、そう言った。

「坂山さんのお兄さんはね、あの男達の仲間なの。坂山さんは、今まで散々お兄さんに苛められてきた。今回も、きつと脅されて、無理やりその約束をさせられたのよ」

そうでしょう？と綾華が坂山さんに声を掛ける。坂山さんは、黙って頷いた。

俺は二人を交互に見比べた。そして、

「……ごめん、取り乱した」

と手で顔を覆い、息を吐いた。坂山さんに、頭を下げる。

「気が動転してたんだ。考えてみれば、別に坂山さんは悪くないよな。脅迫されていたことは明白だったのに、俺は謝っている君に対して、怒りをぶつけてしまった。本当に、すまない」

俺は頭を深く下げる。

「いいよ、顔を上げて。智也君」

「……痛かっただろう？腕、見せて」

俺は彼女の両腕を取って、その状態を見た。肌が真っ赤になっていた。

改めて、自分が何をしたかを実感する。俺は、よりによって女性に手を上げてしまった。自分はなんて最低な男だと、呆れて声が出ない。

「背中は　」

俺は彼女の肩に手を回し、後ろに向けさせようとするが、坂山さんに黙ってその手を押さえられた。

「平気だから、心配しないで。もうそんなに痛くないから」

「でも」

俺が言い掛けたとき、綾華が「智也」と遮った。

「女の子の背中を見るつもりなの？」

「だって、怪我をしてたら大変だろうが」

「智也がそんなことをしたら、ますます大変なことになるじゃないの。いいよ、私がやる」

綾華が立ち上がり、坂山さんに近づいて、背中に回った。俺が呆然とそれを見つめていると、

「ほら。とつと、着替え買ってきてなさい」

と綾華に半睨みされて、俺はああ、と頷くと急いでその場を離れた。

俺は商店街の洋服店で着替えを買うつと、すぐに駐車場に戻ってきた。綾華は着替え終わると、急がないと打ち上げが始まっちゃう、と言い出した。こんなことがあった後なのに、と俺は反対したが、綾華は言っても聞かないので、俺は二人を打ち上げの会場まで送っていくことにした。再び商店街の人込みの中を歩きながら、綾華が口を開く。

「智也は何で、私の元にあんなに早く駆けつけて来れたの？」

「俺も商店街に居たんだよ。飯食って帰ろうとしたら、綾華が来ないうって、クラスの人達からメールが来てさ。　　というか、何でお前、俺のアドレスを他の人に勝手に教えてんだよ」

「良いじゃないの、別に。智也の携帯のアドレス帳、あまりにも寂しすぎるじゃない？だから、私がいろんな人に了解を取って、アドレスを登録しといてあげたのよ」

綾華が可笑しそうに笑う。さっきの騒動から早くも立ち直り、今は明るい表情を見せていた。その横で歩く坂山さんは、さっきからあまり口を開いていない。

「坂山さん、大丈夫か？まだ、痛むか？」

「うっん、身体の方はもう平気だから心配しないで」

ただ、と坂山さんは俯いた。

「兄さん、このことを知ったら怒るだろうな……」

顔を蒼白にさせて、そう呟く。すると、

「大丈夫、私がついてるから」

綾華が、坂山さんの手を取った。

「いじめられたら、すぐ私に言いなさい。例えお兄さんであろうが、坂山さんをいじめる奴は、許さないんだから」

「兄さん達はまた綾華さんを狙うかもしれないんだよ？」

「大丈夫よ。その為に、この朴念仁がいるんだから」

綾華はぼんぽんと、傍らにいる俺の肩を叩いて言った。

「随分な言い方だな。俺は体育会系じゃないし、喧嘩は苦手なんだぞ」

「嘘ついちゃって。なら、何でさつきはあんなに強かったのさ」

「あれは……」

別に、俺は喧嘩が強い訳ではない。

俺はあの不良達に蛇眼を使って口を封じた後、さらに動きを封じて抵抗できなくさせた。激昂していた俺は、奴らを力の限り殴りまくり、全員を気絶させた。綾華はそれを見て、俺が奴らを素手で倒したのだと勘違いしたのだろう。

勿論、奴らが気絶する寸前に、蛇眼を使って一人一人の記憶を消失させることも忘れていない。奴らには騒動の記憶がないのだから、目を覚ました後に復讐に燃えて、俺達を狙うのも当然ない。

俺は、自分の赤く腫れた手の甲を擦りながら、

「とにかく、今度変な奴に絡まれたら、すぐに逃げるんだぞ。歯向かったりするからこんなことになるんだ」

「仕方ないじゃないの。あのアホ達が、坂山さんをいじめるところを見たら、居ても立ってもいられなくなつて」

「だからって、告白してきた男を逆上させる必要はあるのか？その結果、あの男達に暴行されそうになつたんだぞ 綾華は浅慮すぎ

る。その男がお前に気があったのなら、慎重に言葉を選んで断つてれば、手荒に扱われることはなかっただろうに。隙を見て、坂山さんを連れて逃げればよかったんだ」

「もう終わったことなんだから、言っても仕方ないでしょう。皆無事だったんだから、別に良いじゃないの」

「良くない」

俺は、首を振る。

「もし手遅れになっていたら、俺は一体どうすれば……」

本音を言つと、俺は今この瞬間だって心配でどうしようもないのだ。手遅れになった時のことを考えると、ぞつとする。

俺が深く嘆息すると、綾華がごめん、と言った。

「心配させちゃって、ごめん。今度からは、智也の言う通り、すぐに逃げるから」

「そうしてくれ」

俺が綾華に頷くと、

「綾華ちゃんと智也君って、本当の兄弟みたいだね」

と傍らにいた坂山さんが呟いた。

「二人を見てると、心があつたかくなるのよ」

俺と綾華は、きょんとした表情で、彼女を見る、

「何だか、羨ましいな」

と坂山さんは寂しそうに目を伏せた。おそらく、自分の兄のことを考えているのだろう。俺達は何も言えず、そんな彼女をじつと見ているだけだった。

その時、前方に香我美の姿が見えた。こちらに近づいてくる。俺は、自分が今まで香我美を放っていたことに、ようやく気づいた。

香我美は不機嫌そうだった。それはそうだろう。綾華に何かトラブルが起きたことを知っているはずだから、今までこの商店街を必死に探し回っていたに違いない。

「香我美……」

少したじろきながら、俺は声を上げる。

「香我美さん？」

綾華もきよとした表情で前の彼女を見つめる。

香我美が「加賀君」と、俺を手招きする。俺は小走りで彼女に近寄った。

「綾華さんは、大丈夫だったの？」

香我美は俺の頭越しに、綾華を見る。

「……なんとか。ごめんな、随分探しただろ」

「当たり前でしょう。それ以外のことで、大変だったんだから。」

加賀君、綾華さんの元に向かった時、往来に居た子供や、お年寄りに躊躇なくぶつかって走って行ったから」

「何だって？」

「やっぱり気がついてなかったんだ。子供は足を擦り剥いて泣き喚くわ、お爺さんは腰を強く打って立てなくなるわで、大変だったんだから」

声こそ小さかったものの、表情からして、香我美はかなり怒っているらしかった。怖いほどに冷静な顔、見る者を怯ませる厳しい目

香我美の怒った顔は、冗談抜きで恐ろしかった。

「綾華の件で頭がいっぱいになっていたから、そんなことをしていると、自分でも気づかなかった。……香我美が、俺の代わりにその人達に謝ってくれたんだな。本当に　ごめん」

俺は深く頭を下げた。すると、香我美は慌てて俺の頭を上げさせた。

「何やってるの。別に、頭を下げて欲しいなんて言っていないじゃない。あの時は、緊急事態だったから、仕方なかった。加賀君を責めようとは思っていないわ」

「いや　今日の俺は、どうかしてる。普段なら冷静に判断して対処できるものが、今日は全くと言っていいほどできない……」

俺は唇を引き結び、視線を下げる。

「私も、驚いた。あなたがあんなに取り乱すところ、初めて見たわ」
香我美がそう言った時、綾華がこちらに近づいてきた。

「香我美さん、こんばんわ」

綾華が人懐っこい笑みを香我美に向ける。香我美の顔が赤くなつたのは、気のせいだろうか。

「こんばんわ」

香我美の声音が、俺のときのものと百八十度変わった。まるで清楚なお嬢様であるかのような、優しい口調になる。俺は訝しげに香我美の横顔を見る。

「香我美さんのことは、智也からよく聞いてます。ずっと、話してみたいなあって思ってたんですよ」

綾華が物を言う度に、香我美は人が良さそうに笑いながら、相槌を打つ。

香我美は一見、いつも通り、落ち着いているように見える。しかし、一年の間付き合ってきた俺には解る。香我美は明らかに、拳動不審だ。

「よく、この商店街に来るんですか？」

綾華がそう聞くと、香我美は俺に視線を送る。

「実はな……」

俺は、綾華に香我美がここに居る訳を話した。綾華は話を聞くとやたらと嬉しそうな顔を浮かべる。そして、俺を置いて、三人で楽しそうに話を始めた。商店街を出たところで、香我美はその輪から抜け、

「じゃあ、私はこれで」

香我美は、丁寧にお辞儀をして、挨拶した。綾華と坂山さんは、バイバイと香我美に手を振る。先程からずっと眉をしかめて黙っていた俺は、皮肉っぽい口調で、

「お前、随分と演技がうまいんだな」

と言つてやった。すると、香我美がむっと。一瞬間の間、ほんのわずかに表情を変えた。香我美は、はぐらかすように「そうかなあ」と笑つと、さようなら、と嫌味なほど優しい声で言葉を残し、歩き去って行った。

香我美の背中が見えなくなった途端、

「良い子じゃない!」

と、綾華に力一杯背中を叩かれる。俺はいてえな、と咳き込みながら、

「どこが『良い子』なんだ」

と、言った。

「私の見込んだとおりの女の子だったわ。おしとやかで優しい、素直な子じゃないの」

「……全く正反对だ。毒舌でいじっぱりの、独特な性格の持ち主じゃないか」

俺が可笑しそうにそう言つと、またも力一杯脛を蹴られる。

「一体どう考えたら、そんなこと言えるの?」

「綾華ちゃんの言う通りだよ。とてもじゃないけどそんな人には見えない」

綾華と坂山さんは、「ねえ」とお互いに顔を見合わせる。俺は嘆息しながら、

「勝手に騙されてる」

と呆れて呟いた。

打ち上げの会場に二人を送り届けると、俺は足早に帰路に着いた。今夜も天宮さんが訪ねてくることになっている。だから、家に帰ったら早々に準備を始めなければならない。

俺は暗い夜道を歩きながら、ぽつぽつと星が見える空を仰ぐ。そして、ぼんやりと思考を巡らした。

今夜、俺は全てを思い出せる。

両親が死んだ時の記憶を思い出せば、それは犯人を見つける上での重大なヒントとなる。……すべては、今夜に掛かっているのだ。しかし。

忘れかけていたつらい記憶を思い出すということは、どれほどの苦痛を伴うのだろうか。苦痛は測り知れず、十分な覚悟を持って望

まなければならぬ。

本当に、俺は復讐を成し遂げようと思っているのか。
改めて、そう自問する。そして、即座に、その問いに肯定する。

復讐をすることに、迷いはない。

俺は、もう決意したのだ。復讐という心の鎖に縛られることなく、
平凡な日常を謳歌するために 俺は犯人を見つけ出して抹殺しな
ければならぬ。¥

第一章 八

夜。午前一時を過ぎた頃。

約束通り、天宮さんが屋敷を訪れた。客間で依頼についての打ち合わせを行った後、一緒に裏口へ向かった。

裏口の窓を月光がすり抜けて、辺り一面に降り注いでいた。ブルーに染まったその空間は、静寂に包まれ、どこか神秘的だった。青い闇の中で、しばらく俺達は無言で佇んだ。

「それでは、始めましょうか」

沈黙を破ったのは、天宮さんだった。俺は、ゆっくりと頷いた。

「では、私から離れてください」

天宮さんは手仕草で、俺に後ろに下がるよう指示する。俺は言われるまま、彼女から離れた。

「始めます」

彼女の凜とした声に、静まり返った空間が一瞬震えた。天宮さんは、ゆっくりと目を閉じ、精神を集中し始めた。

俺も彼女に倣い、目を閉じて、精神を研ぎ澄ませる。心を空にし、意識を闇の中に溶かしていく。

精神を集中させるにつれ、徐々に『俺』が消えていく。意識はまるで深海に浮かぶように、ゆらゆらと漂い始める。

少しでも気を抜けば、自分というものを忘れそうになる。このまま、快楽に身を任せ、自我を消してしまいたい衝動に駆られる。だが、それは駄目だ。俺には、やらなくてはならないことがある。寸前のところで、俺は自我を繋ぎとめる。自由奔走に飛び立とうとするそれを、手綱で拘束し手中から離れさせないようにする。

「もう良いですよ」

天宮さんの声がした。俺は、目を開ける。前方の少し離れたところに、天宮さんの背中がある。天宮さんは目を閉じたまま、俺を手

で招いた。俺は精神を集中させたまま、彼女に近づいた。

すると、天宮さんがくりとこちらに身体を向けた。そして、俺に歩み寄り、俺の顔を両手で掴み、自分の顔へと引き寄せた。顎が柔らかい手の感触で包まれる。俺は抵抗せず、されるがままに、顔を前へと引き寄せられる。

徐々に天宮さんの顔が近づいてくる。彼女は目を閉じている。

顔と顔が触れ合いそうになる。そこで、彼女は目を開いた。そして、自身の額と俺の額をこつんと接触させた。

その瞬間、俺の頭に彼女の思考が入ってきた。

『……聞こえる？ 加賀さん』

『聞こえています』

『過去を視ることに成功しました。これからあなたの脳にこの映像を送るけど……覚悟は良いですか？』

『……はい』

『多少、ノイズが混じっているけど、視ることに問題はないと思います』

その声を合図に、俺の頭の中で突然、過去の情景が広がった。

窓の外は、赤い世界だった。まるで、世界が血で染まったかのようだ。半分に欠けた太陽が、山の向こうで轟々と燃えている。

俺は窓際に立ち尽くし、じっと外を見つめていた。

すると突然、裏口の方から、扉を叩く音が聞こえ、俺はびくりと小さな身体を震わせた。

「誰？」

音を立てないように、ゆっくりと廊下を歩く。裏口に行くと、扉のガラス越しに、人影が見えた。すりガラスの為に、その姿ははっきりとは見えない。

「智也。私だ」

聞き慣れた無機質な声がした。それは、紛れもなく、父さんのものだった。俺は扉に近寄る。そして、鍵を解き、ゆっくりと扉を開く。

父さんと、母さんが立っていた。

俺は、二人の姿を見て、目を見開いた。

「智也」

母さんが、血に濡れた唇を曲げ、薄笑いを浮かべた。いつもと全く変わらない、氷のように冷たい笑顔だ。だが、その姿はいつもと明らかに違っていた。

父さんは、母さんの肩に寄りかかるようにして立っていた。父さんは中へ入ろうと、右足を前へ踏み出した。だが、その足は身体を支えきれず、父さんは母さんを巻き込んで玄関の中へ倒れ込んだ。

父さんは呻き声を上げ、倒れたまま顔を上げて俺を見た。

「智也」

地面を這い、俺へ近づいてくる。腹から滲み出た血が地面の上でじわじわと弧を描いて広がっていく。

「閉めて」

倒れ伏した母さんが父さんの傍らで、声を上げた。

俺はすぐに、言われた通り扉を閉めた。

足元で、二人が苦痛に顔を歪め、呻いている。玄関には大きな血溜りが出来ていた。俺は啞然と立ち尽くしていたが、不意に我に返り、すぐに救急車を呼ぼうと電話へと走る。が、背中から「智也！」と母さんの厳しい声が掛かり、俺は足を止めた。後ろに振り返る。

「私達は、もう助かりません。その行動は無意味です」

母さんは、鋭い眼光で俺を射抜いた。身動きが出来ない。

「智也。こっちへ来い」

父さんが腕を伸ばして、言った。俺は、父さんへと近づいた。すると、腕を強く掴まれる。

「いいか、智也。奴らに復讐しろ！」

父さんは、怒りで顔を歪ませて叫んだ。

「奴らを殺せ。家族もろとも、殺せ！」

腕を握り締められ、痛みが走った。

父さんの目の奥で憎しみの炎が激しく燃えていた。その瞳の炎の強烈な光に、俺の目は焼けてしまいそうになる。

「復讐しろ！」

父さんは、俺の目を食い入るようにじっと睨み、叫んだ。父さんの口から、絶叫と共に血が零れ出て、それが俺の胸に掛かる。

「復讐……しろ」

父さんの目の焦点が俺の顔から外れ、虚空を当てもなく彷徨い始める。

「父さん……」

俺の目から熱いものが込み上げ、次第に視界がぼやけていく。そして、ずっと頬の上を雫が滑り落ちた。

「復讐だ……復讐するんだ」

父さんはそう呟きながら俺の腕から手を離す。何を掴もうとしているのか、その手を宙へと伸ばした。

父さんは、復讐だ、と呟き続ける。俺は何度もそれに頷いた。宙へ伸ばされた父さんの腕は徐々に下がっていき、声も消え入るようになくなっていく。

「智也……復讐だ」

その言葉と共に、父さんの腕が地面へと落ちた。そして、父さんの身体は動かなくなった。

父さんは、目を見開いて前方を直視したまま死んでいた。俺は嗚咽を漏らしながら、その顔を見つめる。

「智也……」

父さんの亡骸の横で、母さんが弱弱しい声を上げる。

俺は、母さんへと振り向く。

「父さんの言ったことは解ったわね？」

母さんのその言葉に、黙って頷く。

「私達を死に至らしめた奴らに、復讐するのよ。いい？」

俺は、もう一度深く頷く。頷いた瞬間、目から溢れた涙が、ぽちやんと音を立てて血溜りに落ちる。

母さんの手が俺の頬にずっと触れる。そして、優しく撫でた。「智也」

母さんは、今まで一度も見せたことのない、穏やかな微笑みを俺に向けた。そして、目を細めたまま、母さんは動かなくなった。母さんの手が頬を滑り落ちた。

「母さん……」

俺はその手を握り、泣き続けた。血の湖に涙が落ちて、絶え間なく波紋が広がる。

こんなにも悲しいのは何故なのか、今やっと気づいた。

……二人は、俺の家族だった。この世界で、俺が唯一家族と呼べる人達だった。

憎くても、大切な存在だった。

二人なんか居なければいいのに、と何度も思った。

だけど、今は、二人が居てくれさえすればいいのに、としか思えない。

……取り戻そうとしても、もう遅い。二人は、もうこの世にはいないのだから。

自分の心は、空っぽだと思っていた。だけど、違った。隠れていただけで、大切なものはちゃんと存在していた。失うまで、隠れているそれを見ようとしなかったんだ。だから、こんなにも悲しい結末になってしまった。もし、もっと早く気づいていたなら、失わずに済んだかもしれないのに。

……今度こそ、本当に、心が空っぽになってしまった。もう、この心には何も残っていない。

……だから、誓わなくちゃ。父さんと母さんを殺した人間に復讐する、と。その誓いは、自分に大切なものがあつたという証だ。その証があれば、二人は一生俺の心の中に残り続けるだろう。

「復讐する」

俺は泣きながら、何度もそう呟いた　まるで心に刻みつけるように。

刻め、刻め。消えないように。

……復讐する。俺は、復讐する。

一体どれくらい泣いていたのだろう、涙が枯れ果てた頃、ふと顔を上げた。すると、扉のガラスに人影が映っていた。

「誰」

俺は震える声を絞り出した。

影は長くて、大きい。男だとすぐにわかる。

……血が逆流し始めた。目の前に立っているこの男は、父さんと母さんを殺した奴なのではないか？

「お前が殺したのか！」

俺は戸を勢い良く開けた。すると、そこに立っていたのは、黒いスーツを着た男だった。髪は肩を覆うくらい長い。その男の目が、俺を捉える。俺は男を、睨みつける。

俺はすぐに、先手を打った。『蛇眼』を使い、男の身動きを封じようとする。だが、男は、『蛇眼』の効果がある俺の視線を受けながら、何事もないかのように、ふつと笑った。

「その歳で、魔眼が使えるのか。これは驚いた」

男が、口を曲げて可笑しそうに笑う。蛇眼が効かない、と悟った俺は、すぐに男から離れた。

「機転もよく利いている。瞬時に、魔眼が効かないと理解し、他の呪術の準備に入ってたか」

……見抜かれている。

額に汗が滲む。目の前にいる男は、並みの呪術師ではないと直感が告げる。……この呪術でも、敵うかどうか。

俺は、白蛇を懷から出した。蛇が俺の首に絡みつき、目の前の男

を威嚇する。

「その呪術を使われると、少々やつかいなことになりそうだ。今は、大人しくしてもらおう」

男はそう言つて、一步前へ進み出た。

俺は、目の前の男へ構える。

男は不敵な笑いを浮かべて、口を開いた。

「いいか。魔眼というものは、こつやつてやるんだ」

この男は、魔眼が使える　そう気づいた時には遅かった。俺は、男の魔眼に目を奪われ、全身が凍りついたように動かなくなった。

男は俺に嘲笑を向ける。

「魔眼への耐性はいまいちだったようだな」

罵声を浴びせてやりたいのに、口が固まって動かない。

「君には、この二人が死んだという記憶を、忘れてもらう。君の中で、この事件は元からなかったことになる」

この男は、俺の記憶を消そうとしている。それは、何故か。考えるまでもない、証拠を隠滅するためだ。

俺は必死で足掻こうとする。白蛇に男を襲えと命令を送るが、反応がない。首に絡み付いたまま、じつとしている。

「無駄だよ。呪術を使えないようにした」

男は、俺の意図を見透かしたのか、嘲笑を顔に張り付かせたまま、そう言つた。

「君は私と会つたことを忘れるだろう。そして、両親が死んだことだ。君は次に目を覚ました時、新たな人生の幕開けを迎えるだろう。良かったな、この二人からようやく解放されて」

男は、足元の二つの死骸を眺めながら、可笑しそうに笑う。

お前に何が解る。

俺は心の中で、男に憎しみをぶつける。

「……その通り、何も解らないさ」

と、男は俺の心の内がわかったのか、そう言つた。

「お休み。もう二度と会うことはないだろう」

そう言って、男は俺の記憶を忘失させた。
その瞬間、視界が消え、思考が消え　意識が消えた。

第一章 九

全てを思い出した。二人が死ぬ前に残した言葉、俺の前に現れた謎の男 細部まで、全てを思い出した。

事件の記憶が曖昧だった理由も、わかった。あの長身の男に、俺は記憶を消されたのだ。

だが、記憶の全てが消えることはなかった。それが幸いした。両親が殺されたという記憶と、犯人に復讐しなければならぬという記憶だけは、ちゃんと残っていた。

それは何故か。

母さんは死ぬ寸前に、最後に俺の頬を撫でていった。あれは、記憶がなくならないようにと、俺の身体に呪術を掛けるためだったのだろう。

母さんの呪術によって、俺は記憶を全て消されるのを免れたのだ。俺は、地面に膝をついた。身体が重い。まるで肩に重石が乗っているようだ。

汗が、額を伝って、床の上に落ちる。

「無事に、成功しましたね」

天宮さんが俺の横に立ち、言った。彼女も、汗まみれになっていた。濡れた髪が、頬に張り付いている。

「どうでした？俺の過去を視た感想は？」

俺は、訳もなくそんなことを聞いた。

「正直言うと、非常に怖い体験でした。今まで色んな人間の死に関わってきたけれど、人があんな風に死んでいくのは初めて見ました」「こんな依頼を持ちかけて、すみませんでした。あなたはこれからしばらくの間、悪夢を見るようになるでしょうね」

「どうか、お気になさらずに。依頼を引き受けたのは、私自身ですから」

天宮さんは、青白い顔色のまま笑った。

「疲れたでしょう。過去を視るといっても、昔の出来事を追体験するのと同じですから、身体にすごく負担が掛かったはずですよ」

そう言った天宮さんに、大丈夫ですよ、と答え、俺は立ち上がろうとした。しかし、足に力が入らず、思わず倒れそうになる。俺は壁に手をついて慌てて身体を支えた。

「休んでください」

天宮さんが、真剣な声でそう言った。

「このくらいの疲れなら、少し経てば治りますよ。支払いのこともありますし、客室で話をしましょう」

俺はそう言つて、重い身体を引きずって廊下を歩こうとするが、天宮さんは俺の前に立ち塞がる。

「私は、あなたの身体のことを言っているではありません」

天宮さんは、俺の頬に触れた。

「気づいてないんですか」

と、天宮さんは指を離れた。

俺は自分の頬に触れた。冷たい感触がした。手の平を見てみると濡れていた。

「あまり無理をなさらないで下さい。自分の感情を抑える必要はないんですよ」

つらいでしょう、と天宮さんが悲しそうな視線を俺に向けた。彼女の、憂いを含んだその目を見た途端、俺の心の糸が切れた。

五時になると、天宮さんは屋敷を去っていった。

一人になると、何もすることがなくなり、俺は客室で襖を開けてぼんやりと窓の外を見つめていた。

恥ずかしいところを見られてしまったな、と苦笑する。あんなに泣いたのは一体何年ぶりだろう。

空がだんだん明るくなっていく。夜が終わり、朝が到来する。

時間と共に世界は変化していく。それは、人間も同じだ。時間が経てば、人は変わる。人は、昔の自分の殻を脱ぎ捨てて、絶えず変化していく。蛇が生きていくために脱皮を繰り返さなくてはならないのと同じだ。

俺も、変わった。昔の俺は復讐が人生の全てだった。だが、今は違う。自分にとって大切な、他のものを見つけた。

と、インターホンが鳴った。

夏休みになったというのに、相変わらず馬鹿に早起きだ。俺は首を振り、玄関に向かった。

扉を開けると、「おはよう」と綾華が顔を出した。朝にもかかわらず、不思議なほど元気な声だった。俺はその声に、ただ「ああ」と頷いただけだった。

「どうしたの。元気ないね」

「何でもないよ」

俺は、首を振る。綾華は俺の顔をじっと見つめた。

「いいわ。朝は私が作るから、智也はテレビでも見てなさい」

そう言って、綾華は台所に入ってしまった。

おそらく、綾華は俺の泣き腫らした目にも気づいただろう。けど、そのことには触れなかった。俺は、綾華に心の内で感謝した。しばらくすると、玄関の扉が開く音がし、小母さんが居間に入ってきた。三人で食卓につき、たわいのない話をする。

目の前で、平凡な日常が展開していた。

俺にとつて、それは宝物だった。過去に、生き地獄を体験したからこそ、俺はこの平凡な日常が大切だと気づいた。

今すべきことは復讐なんだ、と改めて自分に言い聞かせる。復讐を終わらせない限り、俺は一生闇雲に走り続けるだろう。そして、走り続けるうちに、この平凡な日常をいつか失ってしまうかもしれない。奔走する身体を止まらせるには、すべてを終わらせるしかない。大切なものを失う前に、すべてを終わらせなければならない。幸福な一時を噛み締めながら、俺は何度も強くそう思った。

第一章 残 天宮 side

早朝だけあって、葉月駅の構内は人気がなかった。たまに、ちらほらとサラリーマンを見かけるだけだ。しかし、数時間も経てば、構内は通勤ラッシュで大勢の人で埋め尽くされるだろう。この人気のなさは、嵐の前の静けさと言っている。

通路の壁に、「ようこそ、葉月市へ」と若い綺麗な女性が笑顔で立っているポスターが貼られている。私はそれを漫然と眺めながら、改札口へ向かう。

静まり返った狭い通路に、自分の足音が響き渡る。

おそらく今後、この葉月市を訪れる機会は、依頼の用件以外ではないだろう。勿論、この駅に降りることもない。

少年の顔が、ふと頭に浮かんだ。

今回の依頼主だった加賀智也は、霊能力者だった。しかも、彼は霊力の強い血筋に生まれた。おそらく彼の家系は、昔から、シヤーマンなどの呪術師をたくさん生み出してきたのだろう。

加賀智也の両親は、ある日、何者かによって殺された。殺人という大きな負を引き寄せたということは、彼の血筋に伝わる呪術は、おそらく負の要素が強いのだろう。負の要素が強いということは、その呪術は人間に害をもたらす可能性が高いということになる。

つまり、加賀智也は危険人物だ、ということだ。人間に害を及ぼすような凶器を、彼は持っているのだ。

私は、ごくりと唾を飲んだ。背筋を冷たいものがすつと撫でる。

このまま、見過ごして良いのだろうか。

私は彼に、『過去を視る』という難度の高い依頼を頼まれ、それを成功させた。少年は過去に立ち返り、両親が死ぬ瞬間を再び目の当たりにした。

けれど、それは彼にとって本当に良かったのだろうか。

両親が息絶えるのを見ることが一体何に成ると言うのだろうか。両親

親を殺した者への憎しみが一層膨らむだけではないのか。

そして、その憎しみは、彼に凶器を使わせる原動力と成りはしないだろうか。

「私は、どうすれば……」

目を閉じ、軽く目頭を押さえる。

目を閉じれば、すぐにあの光景が浮かんでくる。少年の言った通り、しばらくの間、夢に見そうだ。と、その時、

「君」

と突然、後ろから声が掛かった。男の声だ。どこか聞き覚えのあるその声に、私は後ろに振り向いた。

そこに立っていたのは、眼鏡を掛けた長身のサラリーマンだった。男は痩せていて、その顔はこつこつしており、無表情だった。しかし、彼の周りを漂う空気が、どこか威厳を感じさせた。

私はすぐに誰か解った。昔と変わっていない容貌に、懐かしさを覚える。

「修兄さん」

「やっぱり菜月か。……八年ぶりか？」

無表情だった顔が、人の良さそうな笑顔へと変わる。目の前にいるのは、間違いようもなく、従兄弟の水西修一郎だった。修兄さんは、一見頑固で気難しそうに見える人だが、実際は穏やかな気性をしている。その点で、昔から人に誤解されがちだった。

「八年も経ったにしては、昔と全然変わっていないわね」

「変わったさ。この頃は、事あるごとに身体の節々が痛くなつて困つてる」

修兄さんは、苦笑を浮かべた。

「今から仕事？……まだ朝の五時半よ。随分早いよね」

「会社が遠いものでね。菜月も、仕事か？」

「もう終わつて、帰るところよ」

「大変だな、霊能者の仕事は」

「確かに大変だけど、私は今の仕事に満足してる。当分の間は、や

っていけそうだわ」

「そうか。それは良かった」

兄さんは、安心したように息を吐いた。私は心がほんわかと暖かくなるのを感じた。昔から、兄さんは従姉妹の私のことを何かと心配してくれた。それが今も続いていると思うと、安心感と嬉しさに胸が一杯になる。

「仕事、頑張れよ。つらくなったら、いつでも家に遊びに来ると良い」

「そうねえ……大きくなった綾華ちゃんを見たいのは山々だけど、今のところ仕事が多忙で行けそうにないわ。暇が取れたら伺うかもしれないから、修兄さん、その時はよろしくね」

「わかった。……身体に気をつけてな」

修兄さんは、また会おう、と手を振りながら、他の通路へと去っていった。

私は、兄さんが去った後、密かに溜息を吐いた。

妙な偶然があるものだ、と改めて思う。よりによって、兄さんの自宅のすぐ隣で依頼を行うことになるとは。あながち偶然とも思えなかった。何か、匂うような気がする。

霊力の強い加賀家の隣に、“あの”兄さんが住んでいる、という事実が、さらに問題を複雑かつ深刻にしているような気がする。

私は、胸に漠然とした不安を感じながら、葉月市を後にしたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0249ba/>

蛇咬 スネーク・バイト

2011年12月31日17時05分発行